

## 三枚橋・藤塚遺跡

安曇野市穂高交流学習センター建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2009. 3

安曇野市教育委員会

## 三枚橋・藤塚遺跡

安曇野市穂高交流学習センター建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2009. 3

安曇野市教育委員会



安曇野市(東から)



調査区近景(西から)

# 序

三枚橋・藤塚遺跡は、奈良・平安時代を中心とする集落遺跡です。今から1000年以上前にこの地で、安曇野の先人たちの生活が営まれていたことが今回の発掘調査によって確認されました。

穂高学校・穂高小学校として明治時代以降多くの卒業生を送り出したこの地が、今般安曇野市交流学習センターとして新しく学び・交流の場となることは望外の喜びです。今回の調査は、安曇野市発足後初の本格的な発掘調査であり、多くの方々に携わっていただきたいとの気持ちから調査作業員を公募しました。その結果たくさんの皆様の参加をいただき、多大な成果をあげる調査となりました。ここには、安曇野地域に暮らす人々が地域の歴史・文化をより深く知りたいと思う志の一端が現れていますと確信します。市民の手による発掘調査の内容を紹介する本書が、多くの方々に活用され、広く文化財の保護・活用および地域の歴史・文化の解明に役立つことを期待いたします。

最後になりましたが、調査にご協力くださいました関係機関、関係諸氏に厚く御礼申し上げ序とさせていただきます。

平成21（2009）年3月

安曇野市教育委員会  
教育長 望月映洲

## 例言

- 1 本書は、安曇野市穗高交流学習センター建設に伴う三枚橋・藤塚遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、安曇野市教育委員会が実施し、安曇野市が費用負担した。
- 3 調査地は長野県安曇野市穗高6765番地2に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である三枚橋遺跡と藤塚遺跡にまたがる。
- 4 平成19年9月26日から平成19年11月30日まで発掘調査を実施し、引き続いて断続的に平成21年3月31日まで整理作業を実施した。
- 5 本書の編集は事務局が行った。執筆は第2章1を森義直、その他を土屋和章が担当した。
- 6 本書で使用した主な引用・参考文献は本文末に一括して掲載した。
- 7 本調査に関する事務書類及び出土遺物・記録類は安曇野市教育委員会が保管している。
- 8 調査全般にわたり以下の方々、ならびに機関からご指導・ご協力いただきました。記して感謝いたします。(敬称略・五十音順)  
請地 誠、大澤 哲、太田 圭郁、桐原 健、鳥田 哲男、森 義直、堀 久士、山下 泰永、  
山田 真一

## 凡例

- 1 調査及び本書での遺構名には、奈良国立文化財研究所(1962)、長野県埋蔵文化財センター(1987)に従い、次の略号を使用している。  
SB：竪穴住居跡・竪穴状遺構 SF：焼土遺構 SK：土坑 ST：掘立柱建物跡 P：ピット
- 2 本書実測図で遺物は次のように表現した。  
土師器：断面無地 須恵器：断面黒塗 灰釉陶器：断面トーン 黒色処理：トーン
- 3 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』による。

# 目次

序

例言・凡例

目次

第1章 調査の契機と経過 .....	1
1 調査の契機と経過 .....	1
2 調査体制 .....	3
3 調査日誌抄 .....	3
第2章 遺跡の位置と環境 .....	5
1 地理的環境 .....	5
2 歴史的環境 .....	6
第3章 調査の方法と成果 .....	9
1 調査の方法 .....	9
2 調査の成果 .....	9
3 遺構 .....	12
4 遺物 .....	32
第4章 総括 .....	45
付表	
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

- |                               |                     |
|-------------------------------|---------------------|
| 第1図 発掘調査位置図（1／50,000）         | 第32図 SB20出土土器       |
| 第2図 発掘調査位置図（1／5,000）          | 第33図 SB22出土土器       |
| 第3図 土層柱状図                     | 第34図 SB23出土土器       |
| 第4図 穂高南小学校穂高部校舎配置図<br>（昭和43年） | 第35図 SB24～SB29出土土器  |
| 第5図 遺構全体図                     | 第36図 土坑、ピット、遺構外出土土器 |
| 第6図 SB1実測図                    | 第37図 遺構外出土縄文土器      |
| 第7図 SB3・SB24実測図               | 第38図 遺構外出土縄文土器      |
| 第8図 SB4・SB23実測図               | 第39図 出土石器・石製品       |
| 第9図 SB7実測図                    | 第40図 出土石器・石製品       |
| 第10図 SB9・SB10実測図              | 第41図 須恵器環口径・器高分布    |
| 第11図 SB14実測図                  | 第42図 建物跡主軸方向        |
| 第12図 SB15実測図                  |                     |
| 第13図 SB16・SB18実測図             |                     |
| 第14図 SB17実測図                  |                     |
| 第15図 SB21実測図                  |                     |
| 第16図 SB22・SB29実測図             |                     |
| 第17図 SB25実測図                  |                     |
| 第18図 SB27・SB28実測図             |                     |
| 第19図 ST1実測図                   |                     |
| 第20図 ST2実測図                   |                     |
| 第21図 ST3実測図                   |                     |
| 第22図 ST4実測図                   |                     |
| 第23図 ST5実測図                   |                     |
| 第24図 SK4実測図                   |                     |
| 第25図 SB1出土土器                  |                     |
| 第26図 SB2～SB4出土土器              |                     |
| 第27図 SB7出土土器                  |                     |
| 第28図 SB9出土土器                  |                     |
| 第29図 SB10出土土器                 |                     |
| 第30図 SB11～SB14出土土器            |                     |
| 第31図 SB15～SB18出土土器            |                     |

# 第1章 調査の契機と経過

## 1 調査の契機と経過

### 開発事業の概要

本調査は安曇野市穗高交流学習センター建設事業にかかる緊急発掘調査で、事業主体者は安曇野市である。安曇野市穗高交流学習センターは、安曇野市図書館システムの中核的機能を有する「中央図書館」、「収集・保存」「活用・学習」「発表・展示・顕彰」の機能を備えた「地域学習館」、研究発表や講演会、音楽鑑賞等に利用できる「多目的交流ホール」が併設される複合施設で、建築面積は3797.87m<sup>2</sup>である。



第1図 発掘調査位置図 (1/50,000)



第2図 発掘調査位置図 (1/5,000)

#### 埋蔵文化財の保護と調査の実施

安曇野市穂高交流学習センターは、平成17年10月1日の町村合併以前から交流学習センターの建設が計画されていたものを、合併以降本格化し平成19年中の着工に至った。

計画地は三枚橋遺跡および藤塚遺跡の両遺跡にかかり、また過去に遺物の採集記録が存在することから合併前にも保護協議が実施されてきた。計画が具体化した平成16年度中には旧穂高町教育委員会によって試掘調査が実施されている。この場所は、旧穂高小学校所在地でもあるため、中世以前の遺構は残存していない可能性が高いと考えられていたが、小学校校舎による搅乱は部分的であることが明らかにされた。また、オッポリ沢の氾濫原と考えられる流路跡も検出されている。

この調査の結果をうけて、建設計画が本格化した平成19年度に担当部署との協議を随時実施する中で、旧穂高小学校建物で破壊されていない部分について発掘調査を実施することを決定した。平成19年8月23日には「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」(文化財保護法第94条第1項)が申請者安曇野市教育長月映洲氏から提出され、8月28日に長野県教育委員会教育長から「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」の通知があった。これに基づき安曇野市教育委員会で調査体制を整え、9月26日から11月30日にかけて発掘調査を実施した。整理作業は12月から開始し、断続的継続しつつ平成21年3月に本書を発行して全事業を終了した。

## 2 調査体制

平成20年4月1日に安曇野市教育委員会事務局内の組織改変があり、この発掘調査事業に関する事務局が社会教育課文化財保護係から文化課文化財保護係へと所管変更となった。

平成19年度

調査主体 安曇野市教育委員会

調査担当者 高原 正文（社会教育課長補佐兼文化財保護係長）、土屋 和章（文化財保護係）

作業参加者 青柳 久子、赤羽 照夫、植原 郁子、小穴 金三郎、勝野 長雄、金井 清朔、小林 香、塙谷 将秀、白澤 勇、津幡 文子、原田 徹郎、深澤 恒則、細尾 みよ子、

本田 富保、前田 忍、松田 洋輔

事務局 安曇野市教育委員会事務局 社会教育課

松枝 功（社会教育課長）、高原 正文（社会教育課長補佐兼文化財保護係長）、土屋 和章（文化財保護係）

平成20年度

調査主体 安曇野市教育委員会

調査担当者 那須野 雅好（文化課文化財保護係長）、土屋 和章（文化財保護係）

作業参加者 佐々木 信子、重田 恵子、細尾 みよ子、松田 洋輔

事務局 安曇野市教育委員会事務局 文化課

高原 正文（文化課長）、那須野 雅好（文化財保護係長）、土屋 和章（文化財保護係）

## 3 調査日誌抄

平成19年

9月26日(水) 重機にてトレンチを設定し3箇所試掘。遺構検出面及び攢乱範囲の再確認。	10月9日(火) 雨天のため午前中作業中止。 14:00からBM設定。
9月27日(木) 表土除去。	10月10日(水) SB6~13精査、測量。
9月28日(金) 表土除去。	10月11日(木) SB6、10、11、14精査、測量。
10月1日(月) 表土除去。	10月12日(金) SB6、14、15精査、測量。
10月2日(火) 表土除去。作業員による調査開始、西調査区遺構検出。	10月13日(月) SB14~16、P精査、測量。
10月3日(水) 遺構検出。SB1~4精査。	10月14日(火) SB14、16、17、P精査、測量。
10月4日(木) SB1~10精査。	10月15日(水) SB16、17精査、測量。西調査区拡張。BM移設。
10月5日(金) SB3、9~11精査。	10月16日(木) SB19、P精査、測量。西調査区拡張。業者委託により10mグリッド設定。
10月8日(月) 雨天のため作業中止。	10月17日(水) SB16、17精査、測量。西調査区拡張。BM移設。

- 10月19日(金) 西調査区拡張部分遺構検出。SB 19～21精査。雨天のため午後作業中止。
- 10月21日(日) P精査、測量。2m四方の小グリッド設定。午後、P測量。
- 10月22日(月) P精査、測量。
- 10月23日(火) P精査、測量。
- 10月24日(水) SB1、P精査、測量。
- 10月25日(木) SB4、23、17、SK、P精査、測量。
- 10月26日(金) 雨天(台風)のため作業中止。
- 10月28日(日) 昨日まで台風のため、午前水汲み等現場復旧。午後、SB7、28精査、測量。
- 10月29日(月) SB29、SK、P精査、測量。
- 10月30日(火) SB15、29、SK、P精査、測量。
- 10月31日(水) SK、P精査、測量。東調査区遺構検出。
- 11月1日(木) SK、P精査、測量。東調査区遺構検出。
- 11月2日(金) SK、P精査、測量。東調査区遺構検出。
- 11月5日(月) SK、P精査、測量。東調査区遺構検出。
- 11月6日(火) 雨天のため作業中止。現地説明会の日程調整。
- 11月7日(水) SK、P精査、測量。東調査区遺構検出、東調査区から縄文土器出土。
- 11月8日(木) SK、P精査、測量。東調査区遺構検出。
- 11月9日(金) SK、P精査、測量。東調査区遺構検出。
- 11月12日(月) SB19、25、26精査、測量。  
15:00、雨天のため作業中止。
- 11月13日(火) SK、P精査、測量。一部清掃。
- 11月14日(水) 測量、遺構等清掃。
- 11月15日(木) 午前、清掃、遺構写真撮影、専門者相談。午後、空中写真撮影。
- 11月16日(金) 遺構等最終確認、写真撮影、撤収準備。作業員による作業はこの日まで。
- 11月19日(月) 測量。
- 11月20日(火) 測量。
- 11月21日(水) 測量。
- 11月22日(木) 測量、撤収準備、現地説明会準備。
- 11月23日(金・祝) 10:00、現地説明会。約100名の見学者が訪れる。
- 11月26日(月) 午前、埋め戻し開始、撤収。
- 11月27日(火) 埋め戻し。
- 11月28日(水) 埋め戻し。
- 11月29日(木) 撤収。
- 11月30日(金) 現場作業終了。引き続き室内整理作業ならびに報告書作成作業。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

#### 概観

本遺跡のある安曇野市穂高三枚橋付近は松本盆地の中程にあり、西は飛騨山地、東は筑摩山地と接している。松本盆地は構造性の盆地で、堆積物は主として南西からの梓川水系、南からの奈良井川水系、そして北からの高瀬川水系の堆積物により形成されており、西部山地とは松本盆地西縁線（断層）で、東部山地とは松本盆地東縁線（断層）で区切られている。

本遺跡付近は、梓川（犀川）水系の堆積物の上に西部飛騨山地の中古生層を開析して東流する烏川によって形成された扇状地の扇端付近にあり、標高は542m前後である。

この扇状地は基盤の隆起と扇状地特有の流路の首振りとが重なり、異なる4面程の段丘面を形成しており、現在の扇状地（最下部段丘面）は須砂渡付近を扇頂として穂高方面に拡がっている。古い上部3つの段丘面は更新世（洪積世）のものとみられ、ロームを載せている。最下部の段丘面となる現扇状地は、穂高市街地方面に広大な扇状地を形成しており、完新世（沖積世）のものである。

通常烏川扇状地と呼ぶのは、この完新世にできた須砂渡付近から扇形に拡がる扇状地を指す場合が多い。この扇状地は、南は堀金の田多井～下村付近で黒沢川扇状地と接し、北は富田～橋爪付近で中房川扇状地と接している。本遺跡と直接関係のある扇端は、今まで穂高地域で実施された発掘調査から標高530～540m付近で梓川（犀川）堆積物と混在している。これを地区名とすれば、下堀の東～細萱の西～矢原の西～等々力付近とみられる。

#### 発掘調査地点の地形・地質

発掘調査地点は烏川扇状地の扇端に近く、この付近の堆積物の本体を形成した烏川の本流は、土砂の堆積により次第に河床が上がり、流路を南から北に振り現在に到っている。

発掘面を形成した頃の薄い上部の堆積物は、本流の移動後その後に残された幾筋もの沢が豪雨時の洪水で扇状地上の堆積物を移動させ、更に雨水や小流などにより細粒のシルト質などの堆積物が洗い出されて凹地をラミナ（レンズ）状に埋めて地表面を形成している。

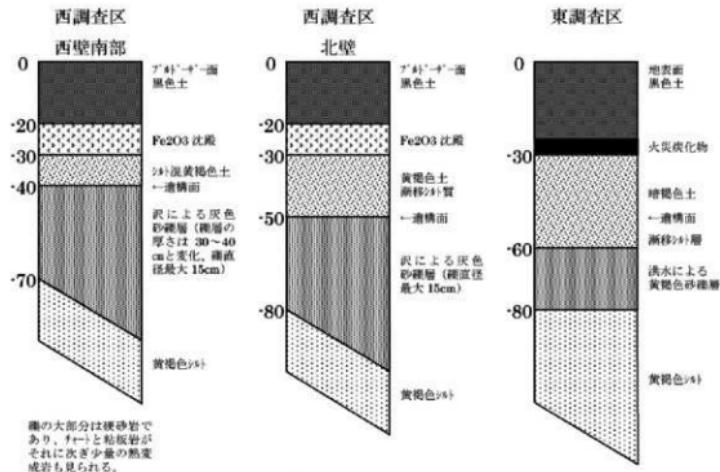
発掘調査地点は西南方向から北東方向へ緩く傾斜しており、標高は前述のとおり542m前後である。西調査区には傾斜方向のSW-NE方向に沢による流路跡があり、シルト面を切っている。この沢の砂礫堆積物は灰白色で錆びておらず、沢の流れによるものであることを示している。礫質は烏川本流と同じく硬砂岩が大部分でチャート、粘板岩、熱変成を受けた堆積岩などが混在する。層の厚さは30～40cmで沢幅は不規則である。この沢は現今井沢の流路の首振りによるものとみられる。この沢の砂礫や両側（岸）のシルト層の直上に平安時代の遺構が存在することから9世紀直前頃まではこの流路（沢）が存在し、砂礫の自然堆積により流路は他へ移ったものとみられる。

東調査区にもSW-NE方向の砂礫層がみられ、古く鋪びたふるい分けの悪い方は洪水により扇状地面を押し流して堆積したものであり、縄文土器が含まれている。新しい流路跡は西調査区のものほどはつきりしないが、一時存在した沢によるものとみられ、灰白色の砂礫であり、時代も西調査区とほぼ同じものとみられる。

以上、発掘調査地点の堆積物をまとめると以下のとおり区分される。

- ① 洪水により扇状地面を押し流してきて堆積したふるい分けが悪く鋪びた（酸化した）砂礫土層。
- ② ①の堆積物から雨水や小流により洗い流されて凹地に堆積したシルト質の層。
- ③ ①②の堆積物を切って流れた沢による堆積物。

なお、発掘調査地点の扇状地堆積物の厚さは、扇端に近いことから、梓川系の沖積層の上に数メートルの厚さで載っているものと推定される。



第3図 土層柱状図

## 2 歴史的環境

本遺跡を包括する安曇野市穂高所在の矢原遺跡群は、「倭名類聚抄」(931~938)にある安曇郡矢原郷、平安時代後期の矢原御厨と推測されている地域である。この地域では縄文時代から近世にかけての遺物の出土が確認されており、矢原神明宮周辺からは、多数の縄文土器、打製石斧、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器等が発見されている。以下、市内の概況も視野に入れ概観する。なお、発掘調査報告等は本文末の引用・参考文献に一括して掲載した。

### 縄文時代

矢原遺跡群からも若干の縄文土器出土記録がある。現在確認できる遺物から、縄文時代中期にこの地

域に人々が暮らした痕跡がうかがえる。

安曇野市全体としての縄文時代の生活痕跡は、主に西山山麓で確認されており、三郷小倉の東小倉遺跡、南松原遺跡、黒沢川右岸遺跡、堀金三田のそり表遺跡、神沢遺跡、穂高牧の離山遺跡、新林遺跡、他谷遺跡等で発掘調査が実施され縄文時代集落の存在が確認されている。時代としては少量ながら早期から晩期まで各期の遺物が出土しており、中期にひとつの画期を迎えることが明らかになりつつある。また本遺跡から犀川を挟んだ対岸の明科地域では、ほうろく屋敷遺跡、塙田若宮遺跡、こや城遺跡、上手屋敷遺跡、北村遺跡等で発掘調査が実施され、ほうろく屋敷遺跡では中期を中心とした集落、北村遺跡では後期に属する多数の土壙墓が確認された。

### 弥生時代

本遺跡周辺からは、過去の発掘調査及び採集遺物等で弥生時代後期と考えられる赤彩を施した土器群とそれに関連する遺構が確認されている。この他、穂高神社境内からは扁平片刃石斧が出土した記録がある。

安曇野市全域では弥生時代の遺跡として、三郷小倉の黒沢川右岸遺跡、豊科田沢の町田遺跡、明科七貴の緑ヶ丘遺跡等で発掘調査がなされ、中期を中心とした集落の存在が確認されている。またこの他に、明科南陸郷ほうろく屋敷遺跡、穂高牧他谷遺跡、堀金三田のそり表遺跡からは発掘調査によって再葬墓が確認されている。

### 古墳時代

本遺跡周辺からは古墳時代集落として馬場街道遺跡、藤塚遺跡等で発掘調査がなされている。このうち、昭和62年（1987）に実施された藤塚遺跡の調査では、今回調査地点から直線距離で約300m離れた場所から古墳時代後期の住居跡30棟と掘立柱建物5棟が見つかっている。

安曇野市全域としての古墳時代には、西山山麓に穂高古墳群および堀金鳥川地域の古墳、明科地域には東川手潮地区の古墳群をはじめ規模の小さい古墳群が数箇所築かれた。このうち穂高古墳群は今回調査地点からみると扇頂・扇央付近に位置し、矢原遺跡群における古墳時代集落との関わりが注目される。

### 奈良・平安時代

前述の通り矢原郷および矢原御厨に比定される矢原遺跡群は、奈良・平安時代の遺跡が隣接しており、過去の発掘調査によって市内でもこの時期の様相が比較的明らかな地域のひとつである。ただし8世紀から9世紀にかけての様相は比較的資料が少なく10世紀以降に住居数の増加傾向が見られる。馬場街道遺跡の調査成果からは、8世紀に比定される堅穴住居3棟、10~11世紀に比定される堅穴住居5棟、土壙1基等が確認された。

市内では、明科地域で7世紀第3四半期創建と考えられる寺院跡が確認されており、これは長野県内でも最も古い寺院のひとつとして特筆される。また、豊科地域の東山山中では須恵器窯跡群（上ノ山窯

跡群・菖蒲平窯跡群)が形成され、その製品は広く松本平に供給されている。

### 中世以降

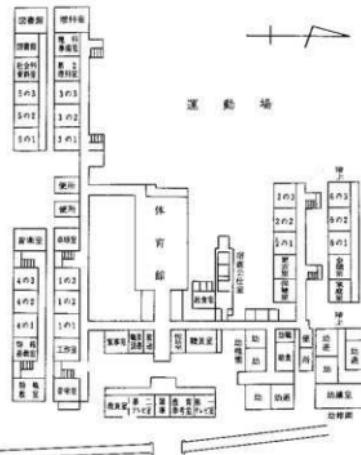
矢原遺跡群およびその周辺で中世以降の遺跡は遺構が点在的に確認されている程度である。馬場街道遺跡では中世住居跡が1棟確認されている。

安曇野市全域としては、東西山麓に戦国期とされる山城、平地には中近世の館跡等が築かれた。農科地域ではこの時期の城館等について発掘調査が行われ、その内部構造が明らかにされている。また、集落跡として農科地域の上手木戸遺跡では長野自動車道の建設に先立ち昭和61年(1986)に発掘調査が実施され、堅穴建物・掘立柱建物等が検出されている。

### 今回調査地点

今回調査地は長野県安曇野市穂高6765番地2に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である三枚橋遺跡と藤塚遺跡にまたがる。昭和62年(1987)の藤塚遺跡発掘調査地点から直線距離で約300mの地点に位置し、従来から遺物採集等が報告されていた場所である。この地は、明治19年(1886)穂高小学校が置かれてから穂高小学校の時代を経て、昭和43年(1968)穂高南小学校穂高部校が閉校するまで学校用地として利用された。この間、大正2年(1913)に南校舎、体操場、宿直室が完成、大正8年(1919)に新校舎の完成などを経て、閉校時には第4図のような配置となっている。

発掘調査に先立ち、遺構等の残存状況を把握する目的で試掘を行ったところ、この図で建物のある部分は遺構等が破壊されていることが判明した。また、元来緩傾斜地であったと考えられる地形を、学校用地として利用するため調査地西側は削平されており、運動場として利用されていた部分も表土がほとんどなく、場所によっては遺構面が現在の整地層直下に位置していることが確認できた。これとは対照的に、調査地点東側では遺構面が深く、校舎の攪乱の間に遺構が残存している箇所が僅かに確認できた箇所がある。



第4図 穂高南小学校穂高部校舎配置図(昭和43年)

## 第3章 調査の方法と成果

### 1 調査の方法

#### 試掘調査

町村合併前の平成16年度に旧穂高町教育委員会によって試掘調査が実施された。この試掘調査では、A、A'、B、Cの4箇所に幅約1m、深さ1～2mのトレーナーを設定し、遺構等の有無・破壊状況・深度について観察がなされた。この結果、旧穂高小学校建物範囲内では遺跡が破壊されていたが、建物範囲外では遺構等が残存していることが確認された。遺構面の深度に関しては、緩やかな東斜面の地形をグラウンド造成時に削平したため計画地西側で浅く地表下5cm程度で堅穴建物跡床面が検出され、計画地東側でも奈良時代初頭から平安時代の堅穴建物跡が地表下40～80cmで確認された。

#### 発掘調査

試掘調査の結果、旧穂高小学校建物範囲内では遺構等の残存がないことが確認されたため、遺構等が残存している部分で穂高交流学習センター建築面積にかかる範囲について調査区を東西に大きく区分し、両調査区にかかるよう10mグリッドを設定して発掘調査を実施した。試掘調査結果によって遺構面深度が明らかとなるため、検出面設定を行い重機で検出面直上までの表土を除去した後、遺構検出は人力で行った。遺構精査は堅穴建物跡については基本的に4分割して掘り下げ、それ以外の遺構については2分割して掘り下げを行った。遺物の取り上げについてはグリッドごと・遺構ごとに取り上げたものほか、必要に応じ出土位置を記録して取り上げたものもある。

#### 調査記録

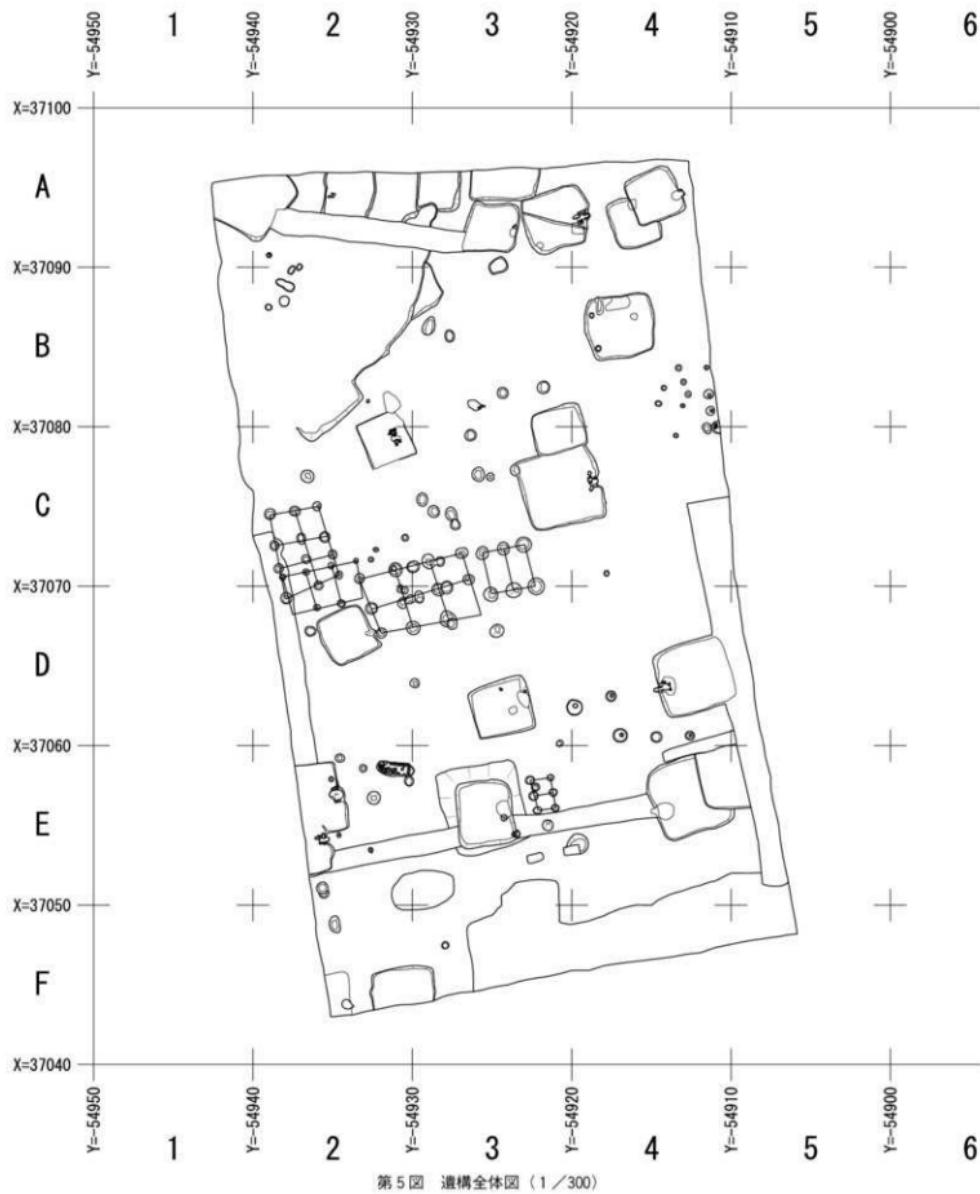
遺構測量は10mグリッドに基づき20分の1の縮尺で行い、必要に応じ10分の1の縮尺で実測した。記録写真としては主として35mmカメラを使用し、補助的にデジタルカメラを併用した。

### 2 調査の成果

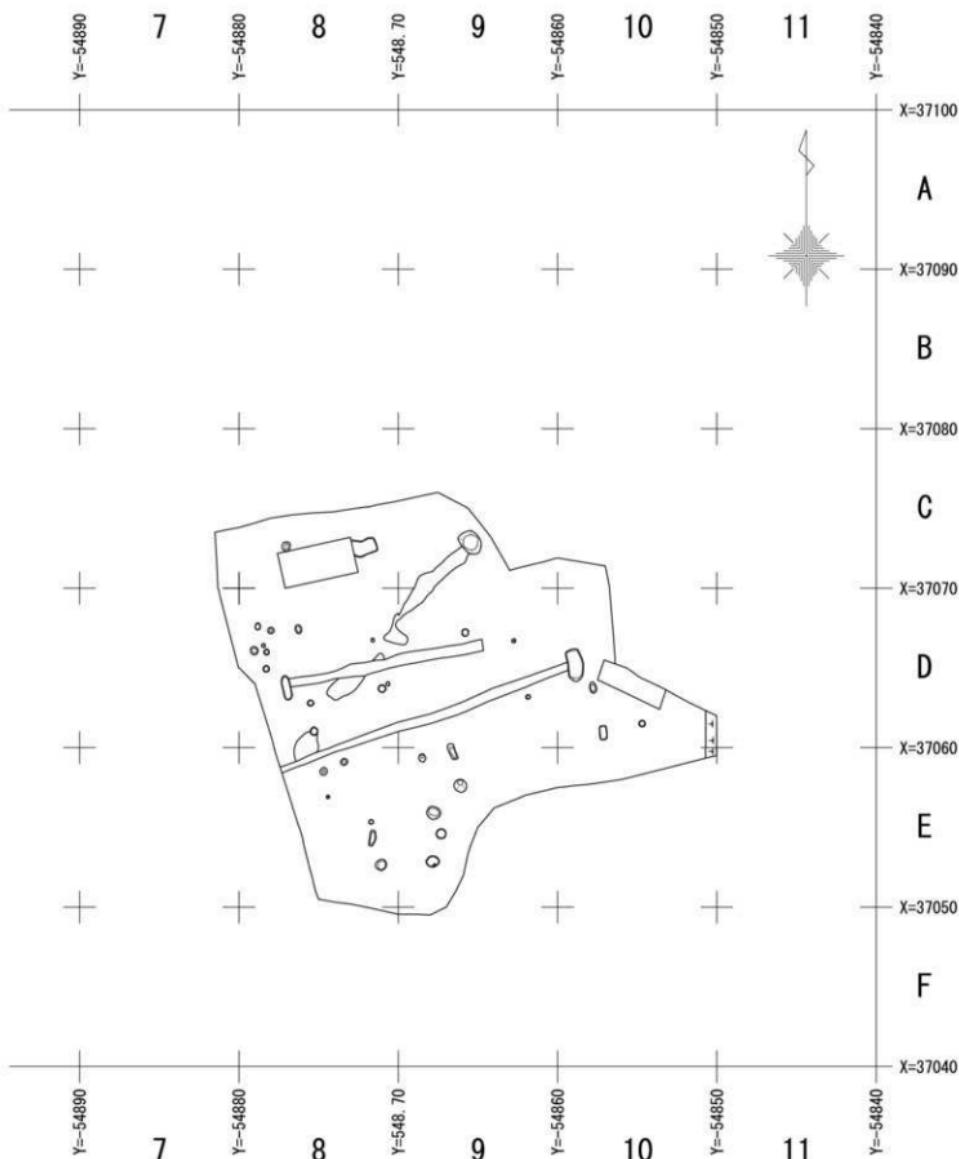
#### 遺構と遺物の概要

検出・精査した遺構は堅穴建物跡25棟、掘立柱建物跡5棟、土坑14基、ピット132基、溝跡3箇所である。堅穴建物跡・掘立柱建物跡は西調査区に密集しており、東調査区では確認されていない。また、掘り込みを検出していない焼土遺構も確認しており、これらが住居跡であった可能性も残る。

遺物から判断される遺構の時期としては、奈良・平安時代を中心とするが、断片的に古墳時代の土器を確認している。この他に、東調査区で小規模ではあるがまとまって縄文時代晚期土器が出土した。この付近からは、打製石斧や石鎌も確認されているが、関連する遺構は確認できていない。



第5図 遺構全体図 (1 / 300)



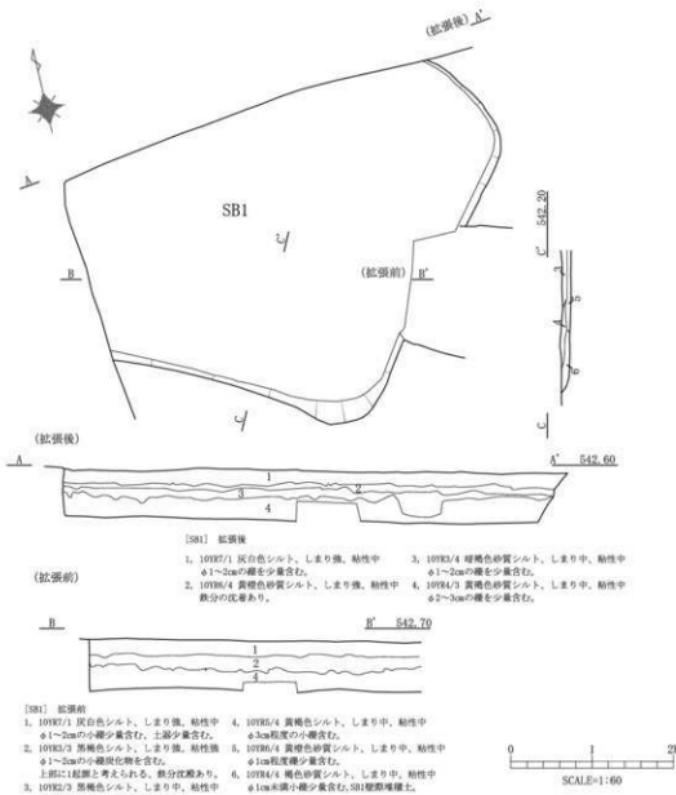
### 3 遺構

豎穴建物跡

この調査では、西調査区で25棟の竪穴建物跡を確認した。またこの他に、西調査区で1箇所、東調査区で1箇所の焼上遺構を確認しており、これらを炉またはカマドとする住居跡が存在した可能性もある。確認された竪穴建物跡はいずれも住居跡と考えられる。

SB1 (第6回)

西調査区北西隅 A1・A2 グリッドに位置する。暗褐色土層を掘り込んで構築され壁面は斜めに立ち上がる。建物北西部が調査区外であるため全体は明らかでないが、長軸4.6m（残存）×短軸4.6mで方形を呈し、壁高は約35cmである。炉・カマド等の施設は確認されなかった。



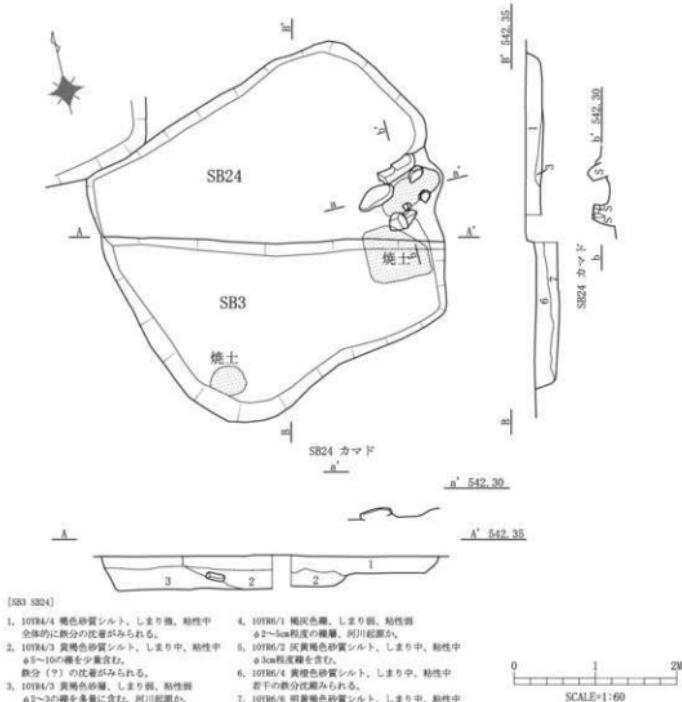
第6図 SB1 察測図

## SB 2

西調査区 A 3 グリッドに位置する。壁面の立ち上がりは緩やかで、掘り込みは不明瞭である。主軸 3.3m × 直行軸 3.0m で方形を呈し、壁高は 15cm を確認した。東壁中央付近にカマドを構築しており、焼土が残存していた。トレンチ断面による土層観察から、SB 2 西壁付近は河川流路により若干の破壊を受けていることがわかった。この河川流路は後述の SB 5 に流入した河川と同一であると考えられる。

## SB 3・SB24（第7図）

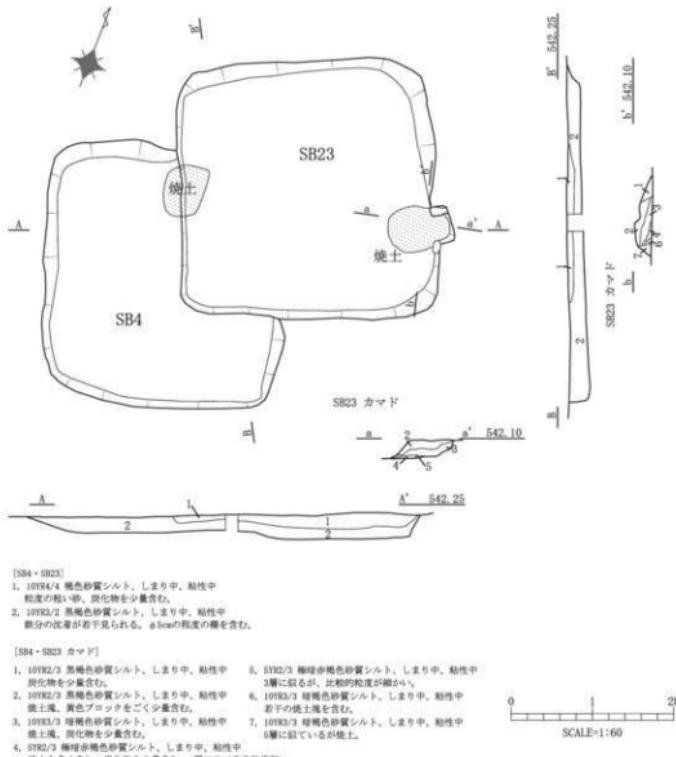
西調査区 A 3・A 4 グリッド境界付近に位置する。この 2 棟の建物跡は重複関係にあり、SB 3 の廃絶後、ほぼ同位置に SB24 を構築したと考えられる。粒度の細かい砂質シルトを掘り込んでおり、壁面の立ち上がりはほぼ垂直で、掘り込みは SB 3 が約 40cm、SB24 が約 20cm である。両建物跡とも同規模で主軸 4.3m × 直行軸 3.7m の方形を呈する。SB24 東壁中央付近からは焼土を伴うカマドが良好な状態で確認された。また、SB 3 東壁、南西隅からも焼土が確認されている。



第7図 SB 3・SB24実測図

## SB4・SB23（第8図）

西調査区A4グリッドに位置する。この2棟の建物跡は重複関係にあり、SB4の廃絶後に一部プランが重なるようにSB23が構築されたと考えられる。粒度の細かい砂質シルトを掘り込んでおり、壁面は斜めに立ち上がりSB4西壁は特になだらかである。掘り込みはSB4が約35cm、SB23が約20cmを測る。平面形は、SB4が主軸3.3m×直行軸3.0mの方形、SB23が主軸3.2m×直行軸3.2mの方形となっている。SB23東壁中央付近にはカマドを確認したが、構築材は被熱した礫が数片残存しているのみであった。また、SB4北壁中央付近には70cm×50cm程度の範囲で焼土が確認された。



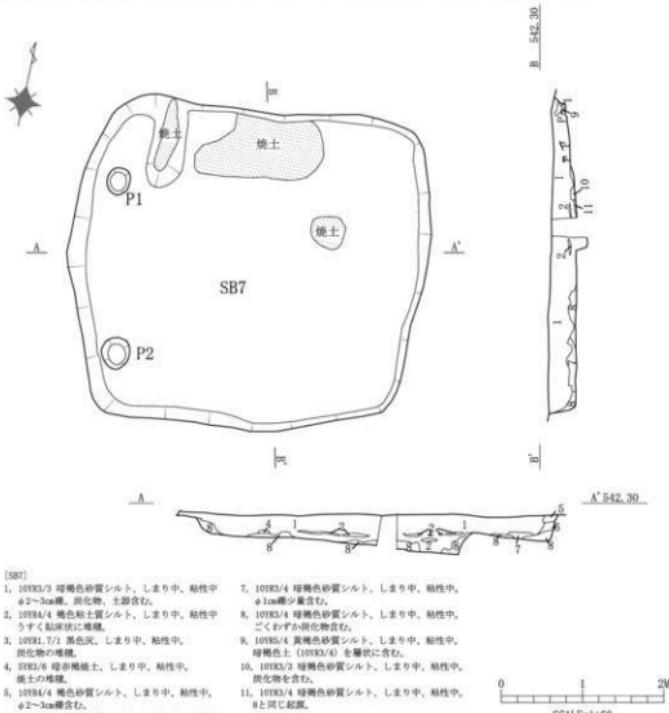
第8図 SB4・SB23実測図

## SB 5

西調査区B3グリッドに位置する。SB 5南西から流れる河川の影響によってほぼ半分が残存していない。このため、規模等は明らかではないが、残存長で $2.2\text{m} \times 2.2\text{m}$ を測り、方形のプランであると考えられる。やや黄色がかった砂質シルト層を掘り込んで構築されており、残存している南壁の立ち上がりは緩やかである。カマドや焼土などの生活痕跡は確認されず、遺物も図示できるものはない。

## SB 7（第9図）

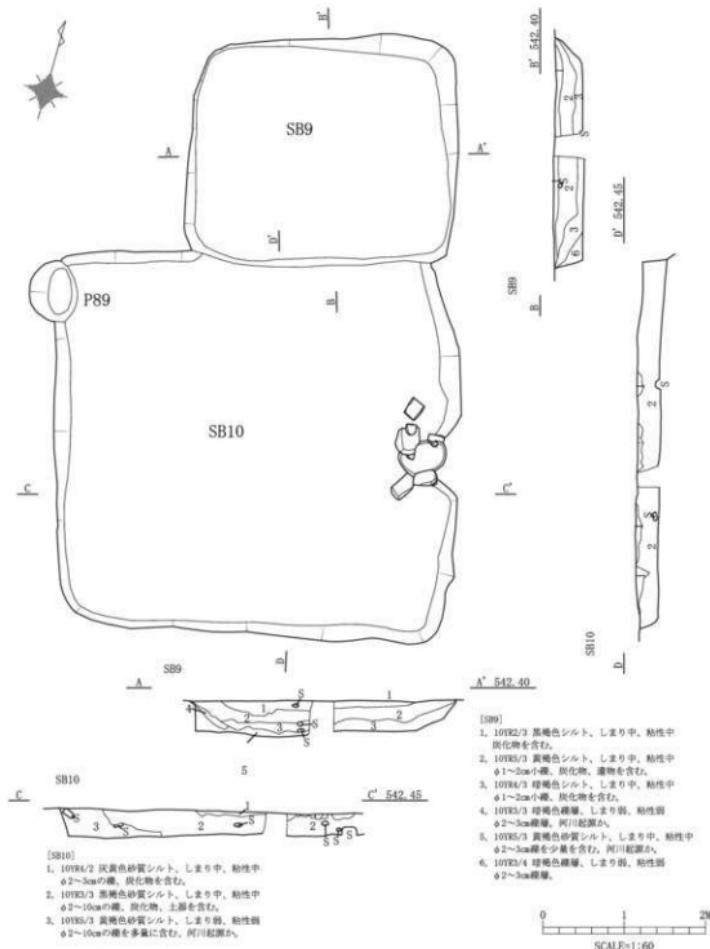
西調査区B4グリッドに位置する。粒度の細かい砂質シルトを掘り込んで構築されており、壁面は斜めに立ち上がる。掘り込みは約 $35\text{cm} \sim 45\text{cm}$ で、平面形は主軸 $4.0\text{m} \times$ 直行軸 $4.5\text{m}$ の方形である。埋土は粘土質シルトの2層が貼床状に薄く観察され、この層が一時期床面であった可能性が示唆される。また、住居中央部は大きく窪んでいる。北壁中央付近、北壁西方、住居内にはそれぞれ焼土が確認され、このうち北壁中央の焼土は $70\text{cm} \times 100\text{cm}$ の広がりをもち、この位置にカマドが存在した可能性がある。この他、建物内西側に柱穴を2箇所確認しており、これらが主柱穴になると考えられる。



第9図 SB 7 実測図

## SB9 (第10図)

西調査区B3・B4・C3・C4グリッドにかけて位置する。南接するSB10を切っており、掘り込みは約40cmでSB10よりやや深い。河川作用によると考えられるしまりの強い砂礫層を掘り込んで構築されており、壁面は斜めに立ち上がる。長軸3.4m×短軸2.8mの方形を呈する。埋土は6層を観察するが、



第10図 SB9・SB10実測図

いずれも小礫混じりであり、SB10と接する南側に径2～3cmの相対的に大きい礫が多い。この建物跡からは、カマド、焼土等の痕跡は確認されなかった。

#### SB10（第10図）

西調査区 C3・C4 グリッド境界に位置する。北接する SB9 に北壁を一部切られているため、SB9 よりは古いことがわかる。また、北西隔壁を P89 に切られている。掘り込みは約35cmで、平面形は主軸4.6m×直行軸5.0m の方形を呈する。堆積の状況として、埋土3層は径2～10cmの礫を多量に含み、この上層に堆積した埋土1～2層に遺物、炭化物等が含まれている。東壁の中央付近にはカマドが良好に残存しており、ここからは焼土も確認された。

#### SB11

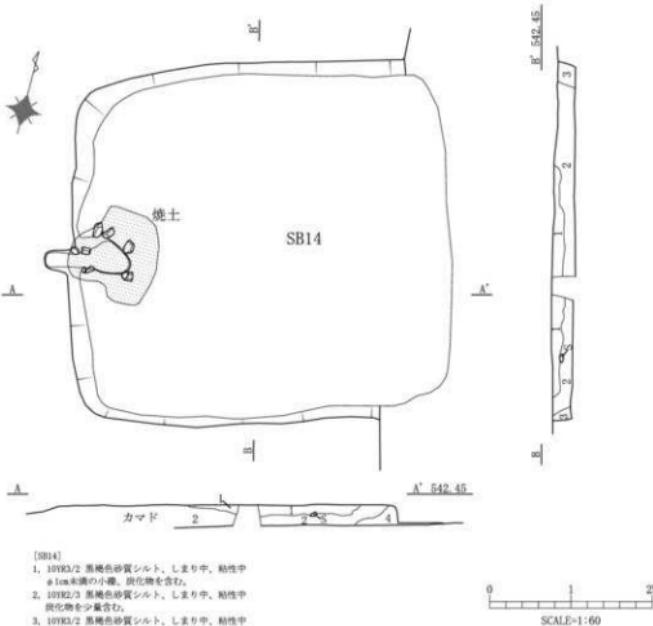
西調査区 B2・C2 グリッド境界に位置する。発掘調査に際しては南東側に SB11 と切り合い関係をもつ竪穴建物跡 SB13 を想定して精査を進めたが、整理段階での総合的な検討から SB13 を欠番とした。河川流路によって削平されているため南壁と東壁の掘り込み面が残存していないが、建物跡床面の痕跡から主軸2.8m×直行軸3.0m 程度の方形を呈すると考えられる。残存している西壁では、掘り込みは浅く壁面が直立に近い形で立ち上がっている。SB11中央やや東よりにカマド痕跡と考えられる礫群と焼土が確認されており、ここからは焼土に面的に貼り付くような形で土器が出土した。また、SB11北東隅には焼土遺構である SK1 が所在するが SB11との関係は不明確である。

#### SB14（第11図）

西調査区 D4 グリッドに位置する。発掘調査当初の遺構等確認用トレンチの影響により東壁は残存していないが、床面は確認できた。平面形は主軸4.4m×直行軸4.7m の方形を呈し、掘り込みは約25cmで壁面は垂直に近く立ち上がる。埋土は3層まで認められ、壁際に堆積した3層は礫を含む。SB14は西壁中央付近にカマドが設置され、構築材と焼土が若干残存している。

#### SB15（第12図）

西調査区 D3 グリッドに位置する。粒度の細かい砂質シルトを掘り込んで構築されている。平面形は主軸3.4m×直行軸3.7m の方形を呈する。確認できた掘り込みは約15cmであるが、従前のグラウンド造成時に上部が削平されている可能性がある。壁面はなだらかに立ち上がり、特に東壁の立ち上がりは緩やかである。東壁中央付近にはカマドが構築されていたと考えられるが、構築材等は残存せず焼土が1.0m×0.7m 程度の範囲に残っていた。また、この他にも建物内に径0.5m 程度の焼土が確認されている。



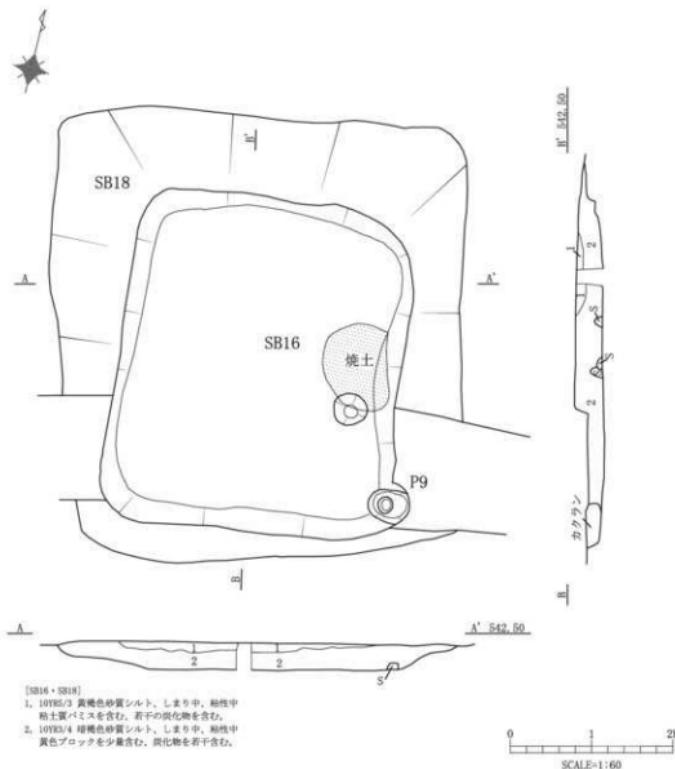
第11図 SB14実測図



第12図 SB15実測図

## SB16・SB18（第13図）

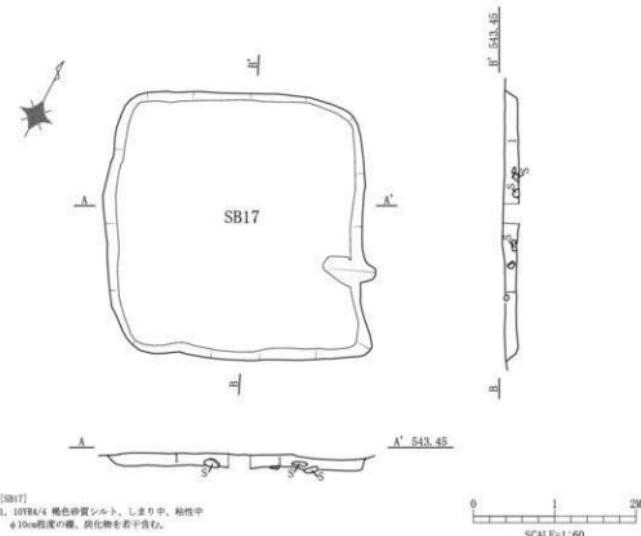
西調査区E3グリッドに位置する。粒度の細かいシルト層を掘り込んで構築されている。SB15同様、グラウンド造成時に上部を削平されている可能性が高く、特にSB18はプラン、掘り込み等が不明瞭である。SB18の内部にSB16が構築されたと考えられ、SB16が相対的に新しい。規模はSB16が主軸3.5m×直行軸4.1m、SB18が長軸5.4m×短軸4.1mを測る。SB16の掘り込みは約35cmで、なだらかに立ち上がる。SB16の東壁中央付近には1.1m×0.8mの範囲で焼土が残存しており、この位置にカマド等の施設が存在した可能性が高い。



第13図 SB16・SB18実測図

**SB17（第14図）**

西調査区 D 2 グリッドに位置する。河川流路と考えられるしまりの強い砂礫層を掘り込んで構築されている。周囲には掘立柱建物が複数存在する。主軸3.2m×直行軸3.3m の方形を呈し、掘り込みは約20cmで壁面は斜めに立ち上がる。埋土には径10cm程度の礫が若干含まれ、河川作用によって短時間に埋没した可能性が示唆される。東壁中央付近にカマド様の施設が存在した痕跡が確認された。



第14図 SB17実測図

**SB19**

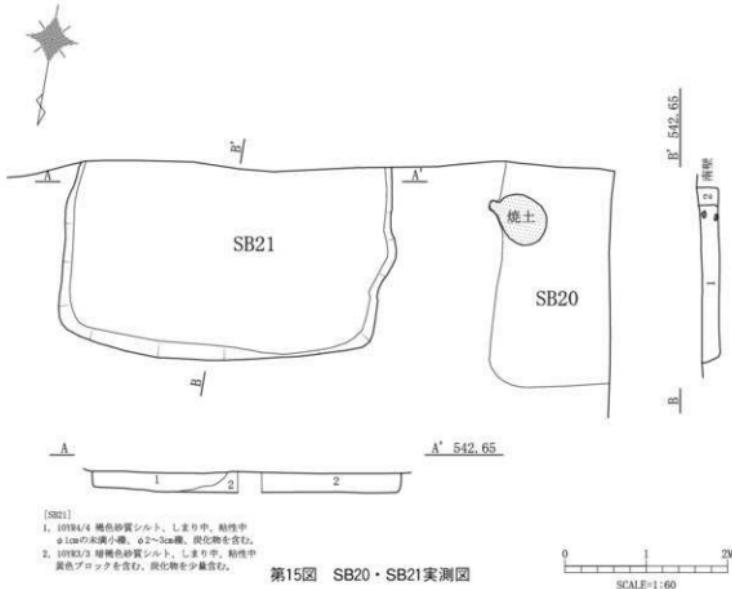
西調査区 A 2 グリッドに位置する。灰白色のシルト層を掘り込んで構築されている。主軸3.2m×直行軸2.7m（残存）を測るが、建物跡が調査区外北側に広がっているため正確な規模と形状は不明確である。掘り込みは約15cmで、東西の壁面はなだらかに立ち上がる。西壁中央付近には炉またはカマド等の施設が存在した可能性を示唆する礫群が確認された。遺物は土師器および須恵器の小片が出土したが図示できるものはない。

**SB20（第15図）**

西調査区 F 2 グリッドに位置する。この建物跡はグラウンド造成に伴う上部削平が著しく、壁の立ち上がりが不明確で床面のみの確認となった。規模は確認できた部分だけで主軸1.4m（残存）×直行軸2.6m（残存）で、北東隅の角を確認していることから方形を呈する可能性が高い。東壁に径0.6m 程度の焼土があり、ここからハケメ調整の施された土師器壺Bが出土した（第32図）。

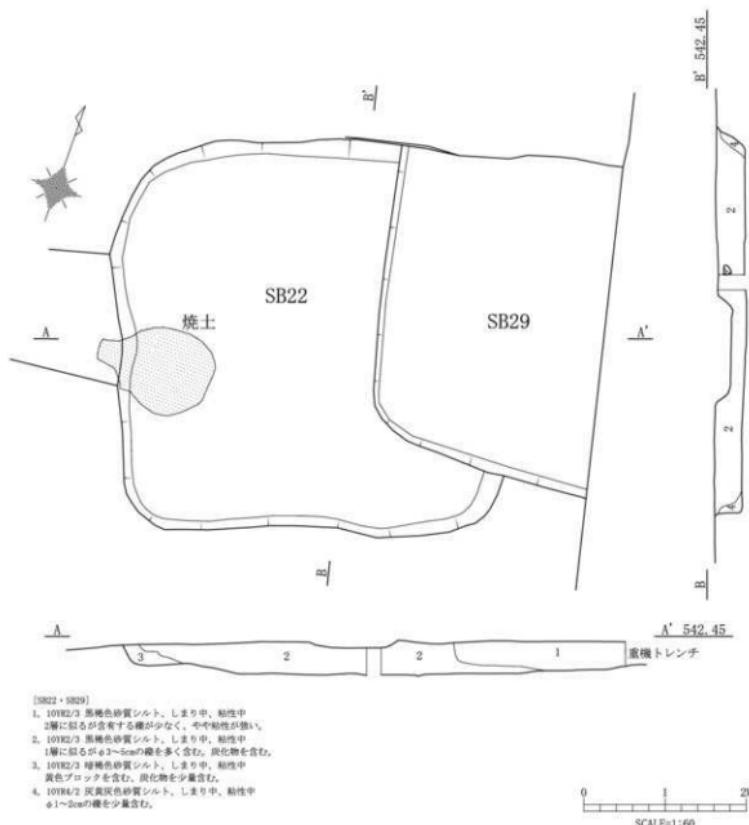
## SB21（第15図）

西調査区 F2・F3 グリッド境界に位置し、建物跡南側は調査区外に延びる。SB20と同様に、上部削平が著しく、周囲は近現代の小学校校舎による搅乱である。規模は東西軸4.0m×南北軸2.2m（残存）であり、掘り込みは約20cm、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。カマド等の施設は確認されていない。また、遺物も土師器および須恵器の小片のみで、図示できるものはなかった。



## SB22・SB29（第16図）

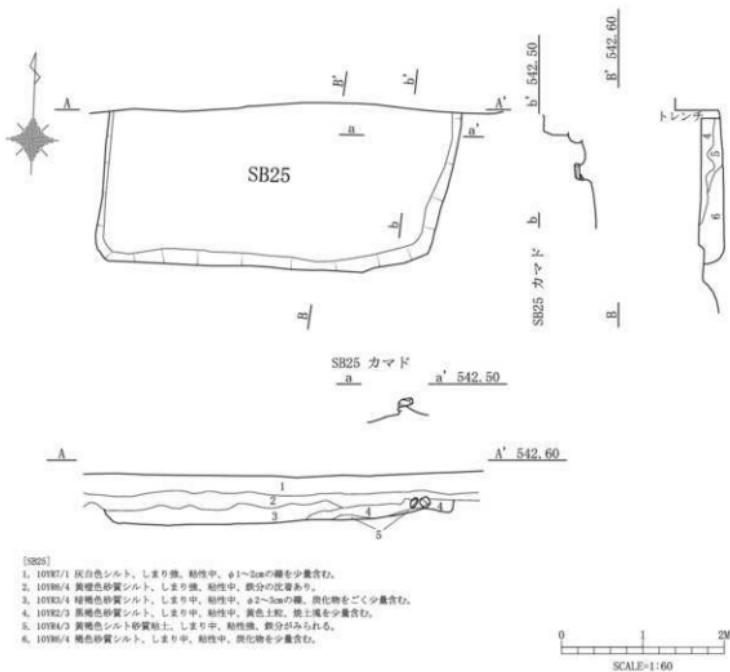
西調査区 E4・E5 グリッド境界付近に位置する。これら2棟の建物跡は重複関係にあり、SB22の東壁付近を切るかたちでSB29が構築され、さらにSB29の北壁はSD2によって切られている。このことからこれら遺構間の時間的な関係は、SB22の構築が最も古く、統いてSB29の構築、最後にSD2の形成ということがわかる。SB29およびSD2の東側は、調査当初に確認用トレンチを設定したため上場が残存しておらず、SB29建物跡は床面のみの確認となった。SB22は主軸4.7m×直行軸4.8mの方形、SB29は東西軸4.3m（残存）×南北軸4.1m（残存）の方形を呈する。SB22の掘り込みは約35cmで、西壁および南壁の立ち上がりはほぼ垂直である。SB29については明確ではないが、埋土1層の堆積状況からSB22とほぼ同規模の掘り込みで、立ち上がりも垂直に近いことがわかる。SB22西壁中央付近に1.0m×1.5m程度の焼土の広がりが観察され、これは煙道のような緩やかな傾斜を保ちながら住居外へ続く。このことから、この焼土の位置にはカマドが存在したことが推察できるが、構築材等は数片の小蝶以外残存していなかった。



第16図 SB22・SB29実測図

## SB25（第17図）

西調査区 A3 グリッドに位置する。暗褐色の砂質シルト層を掘り込んで構築しており、建物跡北側は調査区外に延びる。東西軸4.3m × 南北軸2.0m（残存）で方形を呈する。掘り込みは約30cmで、壁面は斜めに立ち上がる。埋土5層は床面付近に堆積し粘性が強い。建物跡内東側には繊の集積が確認され、カマドの可能性を視野に入れて精査したが、焼土が確認されなかったこと、カマド等の施設を構成するような配列でないこと、床面から浮いて存在し、東壁にも接しないことなどからカマドではないと判断した。



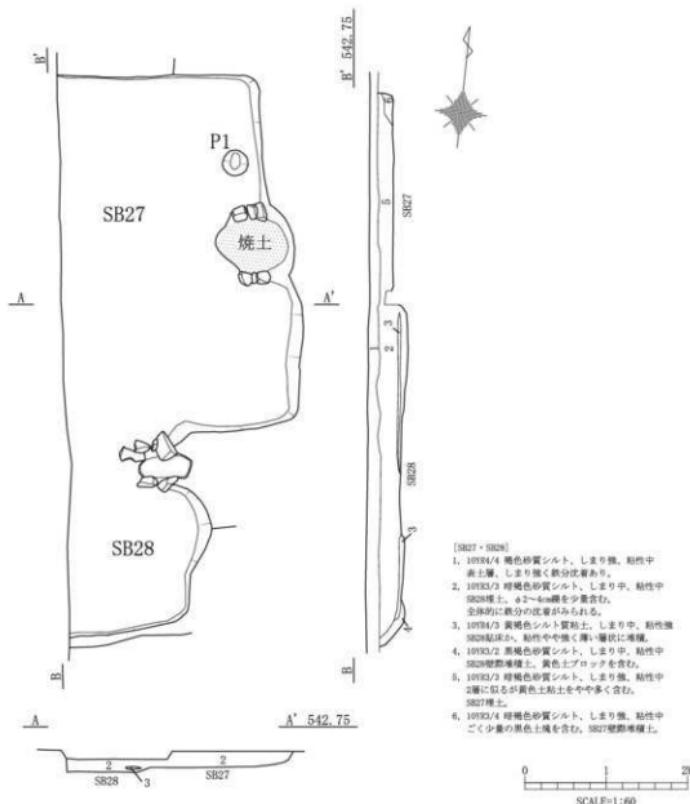
第17図 SB25実測図

### SB26

西調査区 A 3 グリッドに位置する。暗褐色の砂質シルト層を掘り込んで構築しており、建跡跡北側は調査区外に延びる。東西軸2.2m×南北軸2.5m（残存）で方形を呈すると考えられる。南壁はSK 5に切られている。掘り込みは約40cmで、壁面は斜めに立ち上がる。カマド跡等の施設は調査範囲内では確認できなかった。

### SB27・SB28（第18図）

西調査区 E 2 グリッドに位置する。調査区南西に位置し、上部は後世の削平を受けている。これらの建跡跡は平面的に切り合い関係を捉えることが困難で、土層断面から SB27 を SB28 が切っていると観察された。SB27 の壁面は垂直に近く立ち上がるのに比べ、SB28 はやや斜めに立ち上がる。規模は SB27 が主軸2.4m（残存）×直行軸4.3m、SB28 が主軸2.1m（残存）×直行軸4.0m、掘り込みは SB27 が約30cm、SB28 が約40cmであった。SB27、SB28ともにそれぞれの東壁中央付近にカマド跡が存在し、構築材も良好に残存していた。



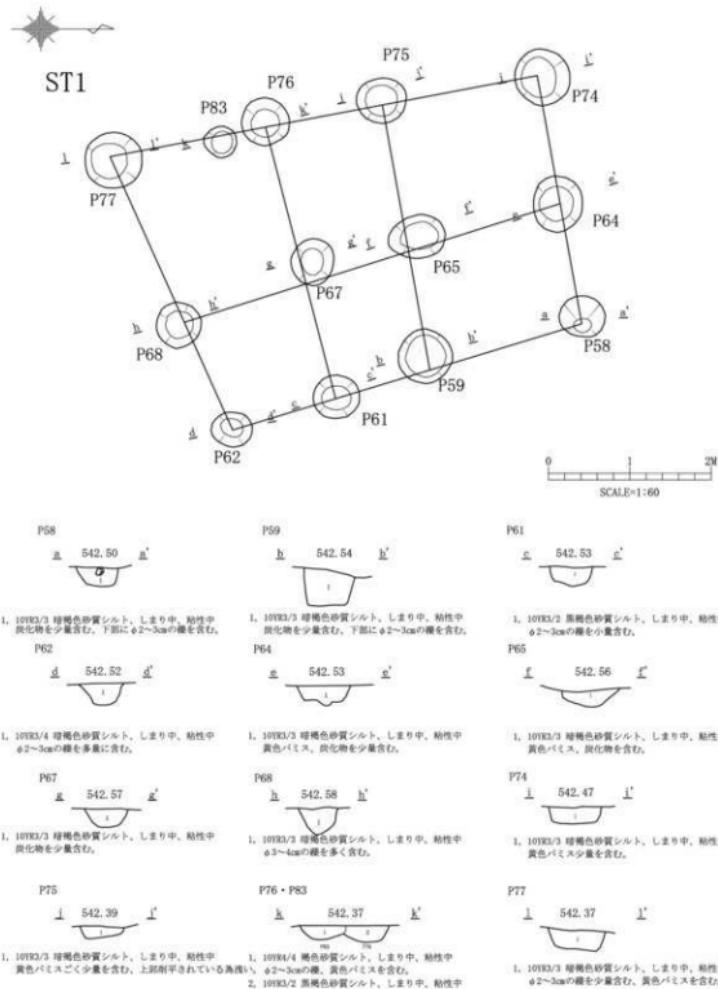
第18図 SB27・SB28実測図

### 掘立柱建物跡

この調査では、西調査区で5棟の掘立柱建物跡を確認した。確認されたビットは西調査区中央から西よりの河川流路跡と考えられる疊を多量に含む部分が多く、次ページ以降のST 1～ST 4もこの箇所に位置する。西調査区、東調査区ともに、この他にも多くのビットが存在する。さらに、C1・D1グリッドやB4・B5グリッドなどはビット群が調査区外に広がる傾向にあり、これらのビットが掘立柱建物跡を形成する可能性がある。

## ST1 (第19図)

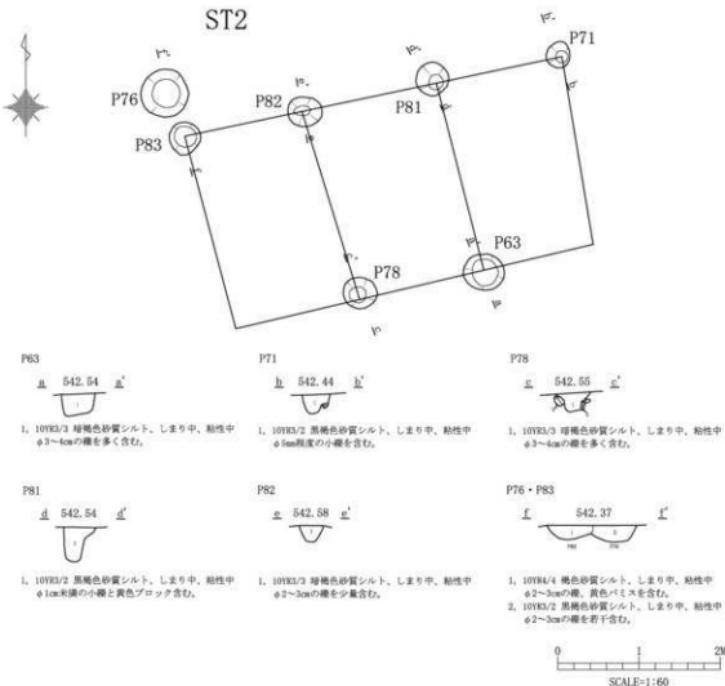
西調査区C2グリッドに位置し、ST2と重複関係にある。P58～P77で構成される2間×3間の掘立柱建物跡で、主軸方向がN13°Wを指す。柱間は梁間約150～170cm、桁行約150～190cmと考えられる。各柱穴は径約70cm程度の円形のプランである。ST1は調査区外西方に広がる可能性がある。



第19図 ST1 実測図

## ST 2 (第20図)

西調査区 C 2・D 2 グリッドの境界付近に位置する。P63～P83で構成される 1間×3間の掘立柱建物跡で、主軸方向が N77°E を指す。柱間は梁間約240cm、桁行約160cmを測り、確認される建物跡の規模としては2.4m×4.7m になる。柱穴の規模は径50cm程度の円形のプランで掘り込みが20～30cmとなつており、ST 1 と比較すると規模が小さい。ST 1 および ST 3 と重複関係にあるが、時間的な前後関係は把握できていない。ST 2 も ST 1 と同様に調査区外西側に広がる可能性がある。この建物跡から時期比定につながる遺物は確認されていない。

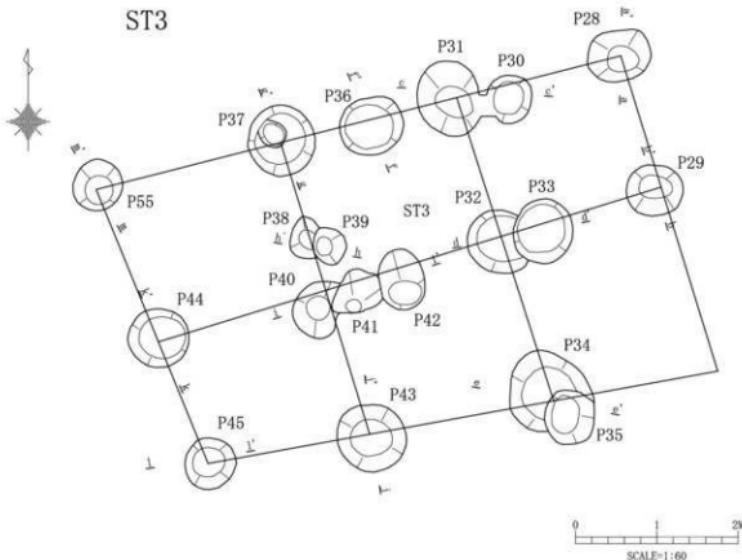


第20図 ST 2 実測図

**ST 3 (第21図)**

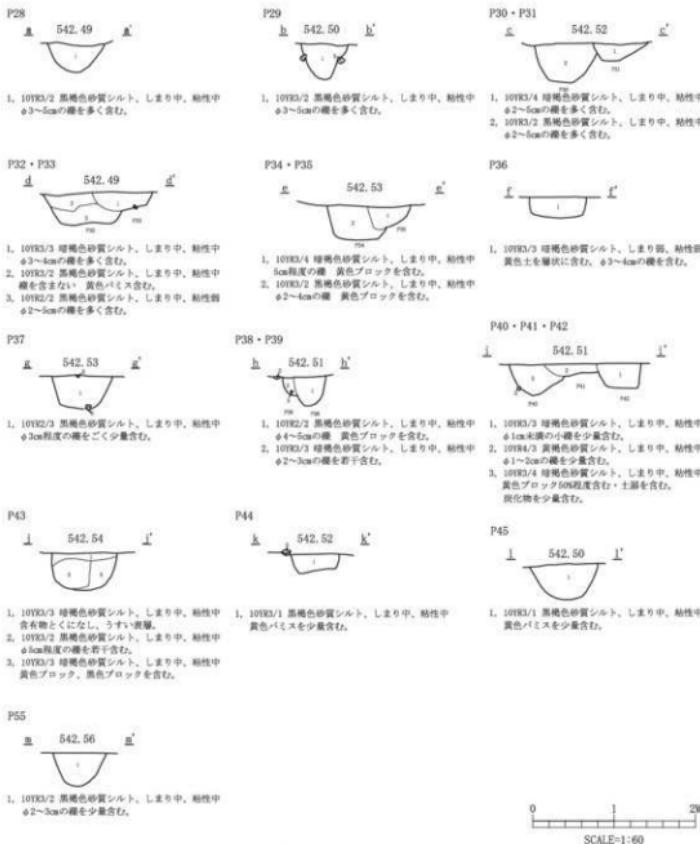
西調査区 C2・C3・D2・D3 グリッドの境界付近に位置し、一部 ST 2 と重複関係にある。P28～P55 で構成される 2 棟 × 3 棟の掘立柱建物跡で、主軸方向が N76°E を指す。柱間は梁間 170～180cm、桁行 210～220cm を測り、確認される建物跡の規模としては 3.7m × 6.3m となる。柱穴の規模は径 70～80cm の円形のプランで掘り込みは 40～45cm であり、ST 2 と比較するとやや大きい。P32・P33 や P40～P42 は切り合い関係があり、柱の建て替えを行った可能性がある。これらはいずれも東側が新しくなっている。なお、この建物跡からは時期比定につながる遺物の出土は確認できていない。

ST 1～ST 4 は西調査区中央付近の河川作用によるしまりの強い砂利層を掘り込んで構築している点が特徴といえる。この河川は SB10・SB11などの堅穴建物跡に流入している洪水層と同一である可能性が高く、これによって前後関係としてこれら堅穴建物よりは相対的に新しいと考えられる。



第21図 ST 3 実測図

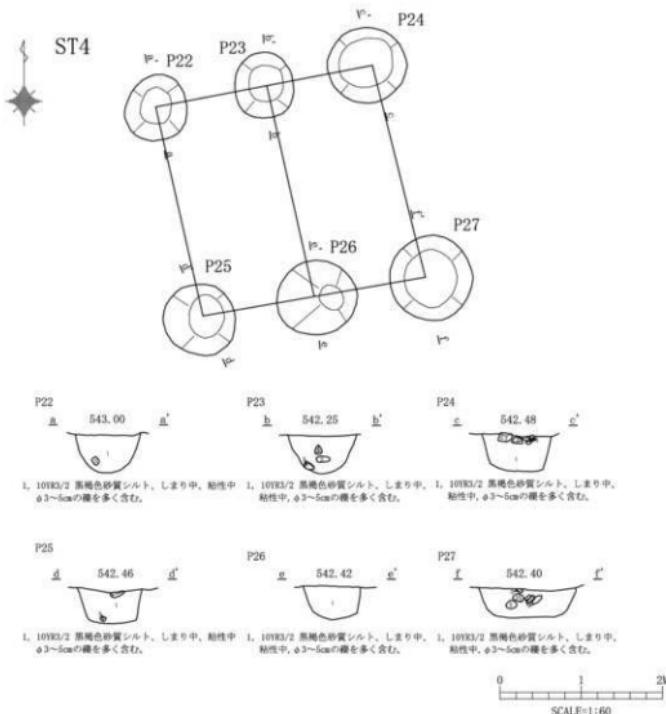
ST3



第21図 ST 3 実測図

## ST 4 (第22図)

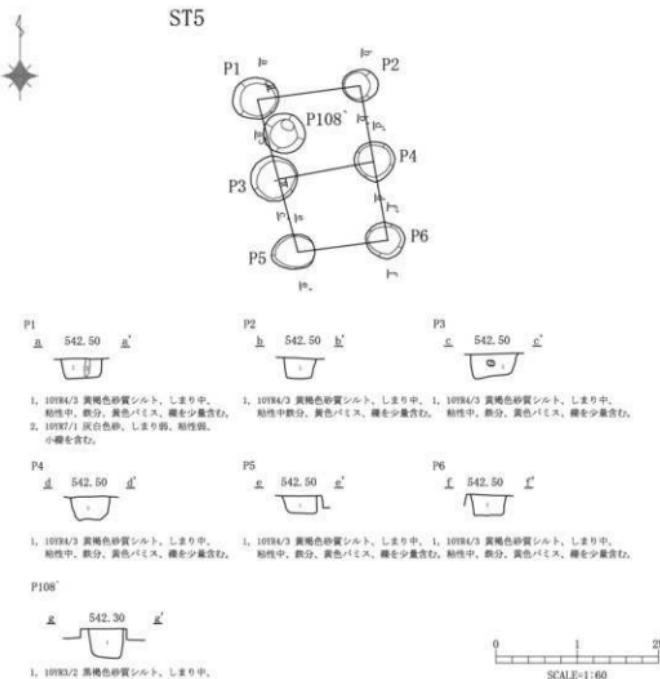
西調査区 C 3 グリッドに位置する。P22～P27で構成される 1間×2間の掘立柱建物跡で、主軸方向は N70°E を指す。柱間は、梁間約220cm、桁行約140cmを測る。柱穴の規模は径80～100cmの円形のプランであり、この調査で確認された掘立柱建物跡の柱穴では最も大きい。なお、この建物跡からは時期比定につながる遺物の出土は確認できなかった。



第22図 ST 4 実測図

## ST 5 (第23図)

西調査区 E 3 グリッドに位置する。P1～P6で構成される 1間×2間の掘立柱建物跡で、主軸方向は N10°W を指す。柱間は、梁間約130cm、桁行約100cmを測り、この調査で確認された他の掘立柱建物跡と比較すると著しく規模が小さい。柱穴は径60cm程度の円形のプランをもつ。ST 5 は自然堆積と考えられる黒色土上面に検出された。柱穴からは須恵器小片などが出土している。



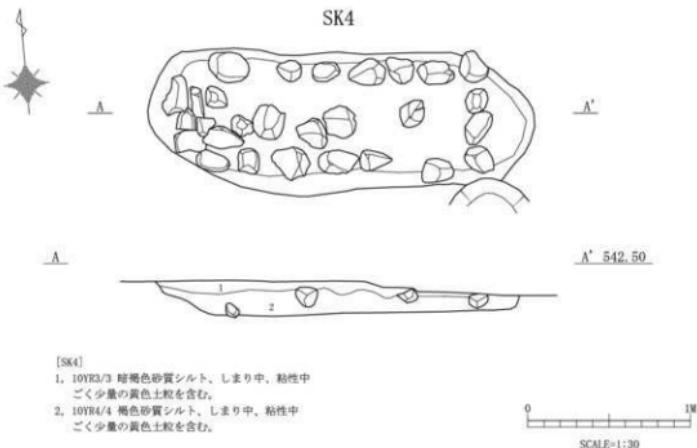
第23図 ST 5 実測図

### 土坑

この調査では土坑について西調査区で8基、東調査区で6基の計14基を確認した。時期比定につながるような遺物の出土した土坑は確認できなかったが、後述のSK 4は墓壙としての可能性を有するものとして特徴的である。

### SK 4 (第24図)

西調査区 E 2 グリッドに位置する。主軸方向は N80°W を指し、規模は長軸240cm × 短軸90cm の長楕円形を呈する。土坑内では28個の繩を確認し、このうち11個は人為的に打ちかかれた痕跡が確認された。出土状況は、SK 4 内西側には繩の集積があり、中ほどから東にかけては長軸方向に3列に並ぶ。石材は硬砂岩、粘板岩質砂岩等周辺の河川または遺跡内で確認されている河川跡で確認できるもののほか、花崗岩が1点ある。この花崗岩は繩集積のほぼ中央部、土坑西端から約30cmに位置している。SK 4 が土壤と仮定した場合、規模と形態から仰臥伸展葬の可能性が考えられる。



第24図 SK4 実測図

ピット

今回の調査では、総数で132基のピットを確認した。掘立柱建物跡として5棟を復元できたが、この他にも組み合わせで掘立柱建物や柵列等になる可能性があるピットも確認されている。この調査ではピット内から明確な柱材、柱痕跡を認めることはなかった。ピット構築の場所としては、掘立柱建物跡と同様で、西調査区中央付近の河川の影響を受けたしまりの強い砂疊層を掘り込んでいるものが一定数認められる。

漏跡

今回の調査では溝跡を3箇所確認した。SD 2はSB22・SB29の北側E4グリッドに位置し、SB29を切っている。東側が調査区外に延びるため総延長は不明である。しまりの強い砂礫が主体で、河川等の影響を受けて形成された流路の可能性もある。SD 3、SD 4はともに東調査区で確認されている。それぞれ土坑との切り合い関係がある。遺物が出土していないため明確な時期比定はできないが、近現代の小学校に付随する施設関連の掘削跡の可能性もある。

#### 4 遺物

今回の調査では、奈良・平安時代に比定される遺物が主体を占めるが、この他一部で縄文時代、古墳時代と考えられる遺物も出土している。以下では、まず遺構ごとに出土遺物を概観し、その後遺構外から出土した特徴的な遺物についてみる。なお、古代の土器についての観察は主に中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見に拠った（小平1990）。

##### SB 1（第25図）

A 1 グリッド中心に位置する SB 1 は、住居全體として遺物の出土が少なく図示できるものは 1 点のみであった。この壺形土器は外面ハケメ調整を施された土師器で、口縁部は面取りされ、底部はナデによって整えられ上げ底となっている。肩が張り口縁部がすぼまる形態は、この調査では他に類例がない。SB 1 中央部から正位で出土し、据付けられたような状態であった。

##### SB 2（第26図）

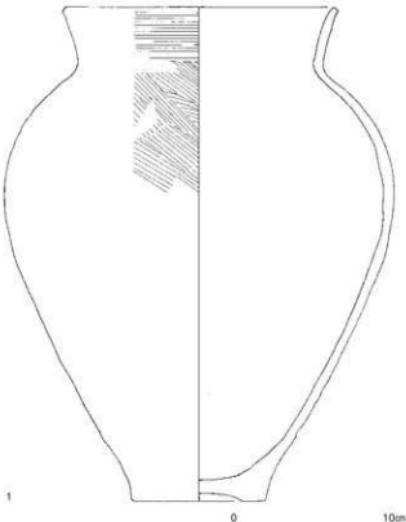
SB 2 出土遺物は、建物内に散在して確認された。2 は、内外面ともに丁寧にミガキ調整され赤彩が施され北陸系器台と考えられる。また 3 は、台付壺の台部と考えられる。市内では安曇野市三郷小倉出土土器に類例がある（三郷村誌編纂会 1980）。これら遺物の様相から、SB 2 は古墳時代に比定される。

##### SB 3（第26図）

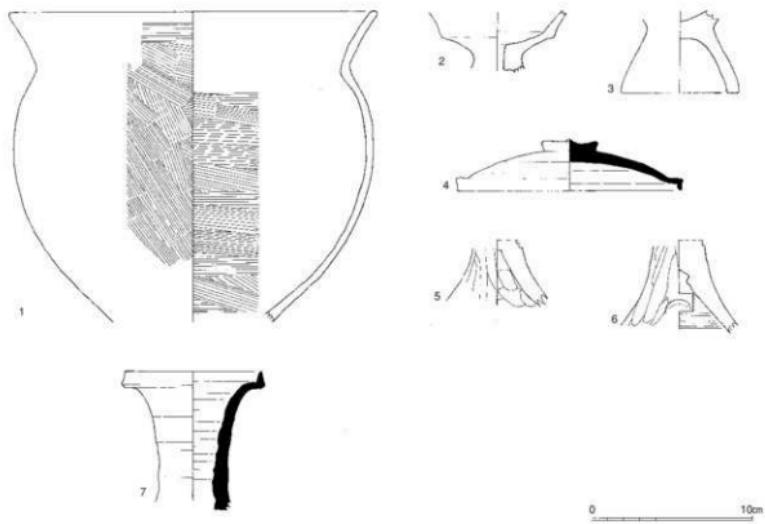
前述のとおり SB 3 は SB 2 と切り合い関係にあり、SB 3 廃絶後、ほぼ同位置に重複して SB 2 が構築されたとして調査を進めた。4 は壺蓋で口縁部が垂直に近く立ち上がる。5 と 6 はともに土師器高壺で内外面ともに丁寧にミガキが施され、6 は円形のスカシ孔をもつ。SB 3 の遺物は床面から出土したものが主体的である。

##### SB 4（第26図）

SB 4 は SB 3 と切りあい関係にあり、SB 4 が古い。ここからは 7 の須恵器長頸壺 A が出土した。口部のみの出土で、頸部は細く直立して折り返し口縁帯を有する。



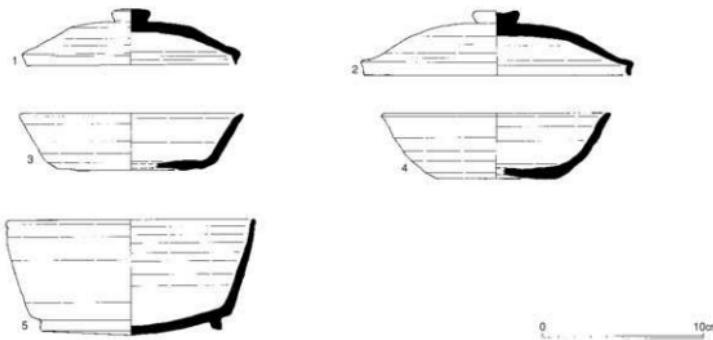
第25図 SB 1 出土土器



第26図 SB 2～SB 4 出土土器  
SB 2：1～3 SB 3：4～6 SB 4：7

#### SB 7（第27図）

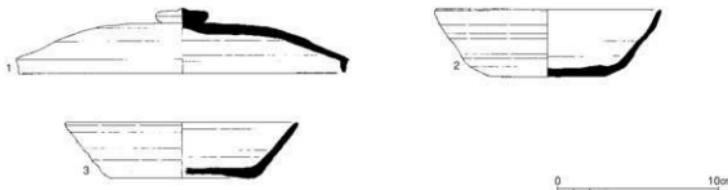
SB 7でも遺物は散在的に出土している。2の須恵器坏蓋は口径が16.2cmを測り、口縁部が内側に「く」の字に折れ曲がる。3、4はともに須恵器坏Aで底部切り離しは回転糸切りとなっている。5は高台を有する坏Bのうち器高が高くなる坏BⅢにあたる。須恵器坏Aは古代5期には切り離しが全て回転糸切りとなり、坏BⅢの出現は古代4期であるとされる（小平1990）。



第27図 SB 7 出土土器

## SB9 (第28図)

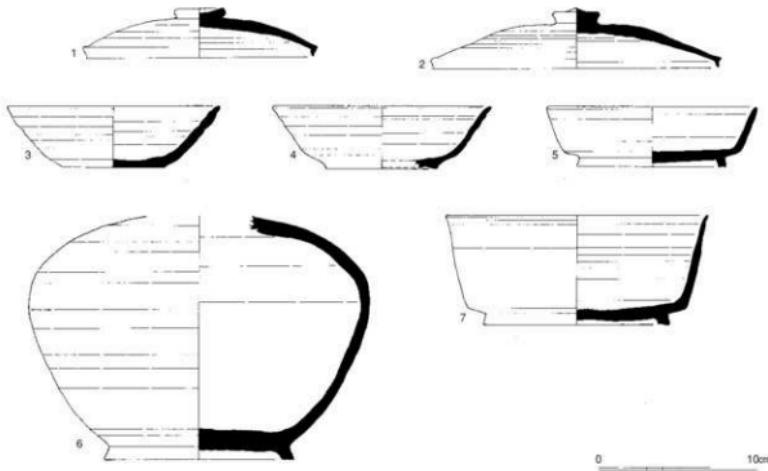
流れ込みの砂礫の中から、須恵器壺蓋、壺Aが出土した。1は口径19.8cmと大型でつまみの輪郭も立体的である。2はやや内湾ぎみに立ち上がる器壁で切り離しは回転ヘラ切り、3はやや開き気味の器形で切り離しが回転糸切りである。



第28図 SB9出土土器

## SB10 (第29図)

SB10からの遺物は主として埋土1~2の堆積している部分の床面付近から出土した。須恵器壺Aのうち3は回転糸切りの後ヘラ削りで調整を施している。また4は回転ヘラ切りの底部切り離しであった。高台を有する須恵器壺Bの5および7も底部は回転ヘラ切りである。また、頸部以上が欠損している6の須恵器壺も回転ヘラ切りで高台は「ハ」の字形に張りが強く開く。



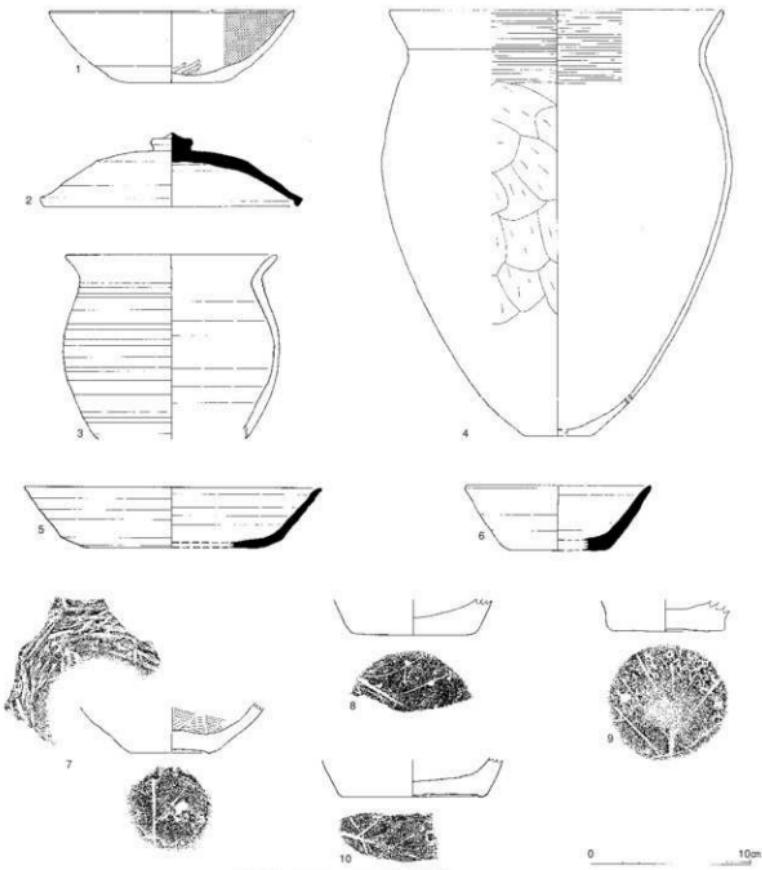
第29図 SB10出土土器

## SB11（第30図）

遺物は中央付近に位置する砾群および焼土から集中的に出土しており廃棄時の位置を保持している可能性が高い。ここからは1の黒色土器A、4期以降に見られる3の小型甕D、外面がケズリ調整で薄く仕上げられる4の土師器甕Cが出土した。このうち4の頸部はやや「コ」の字を呈する段階にある。

## SB14（第30図）

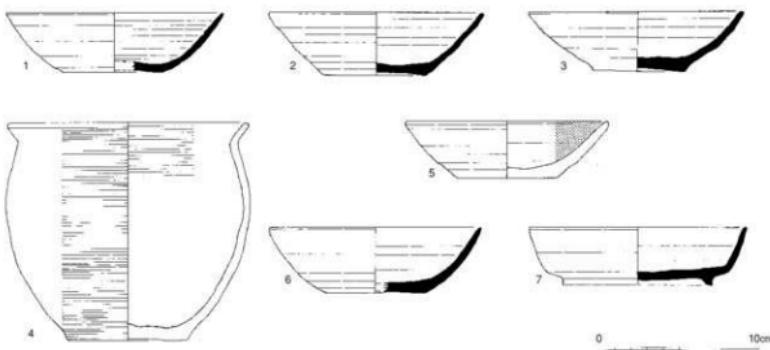
SB14出土遺物は、カマド付近からの出土が主体的に認められた。5に見られる口径の大きい須恵器甕Aは南栗SB184などに類例がある（小平1990）。



第30図 SB11～SB14出土土器  
SB11：1～4 SB14：5～10

**SB15（第31図）**

遺物はカマド付近からの出土が主体的となっている。1の底部切り離しは回転ヘラ切りで、2～4はいずれも回転糸切りであった。



第31図 SB15～SB18出土土器  
SB15：1～4 SB17：5 SB18：6～7

**SB17（第31図）**

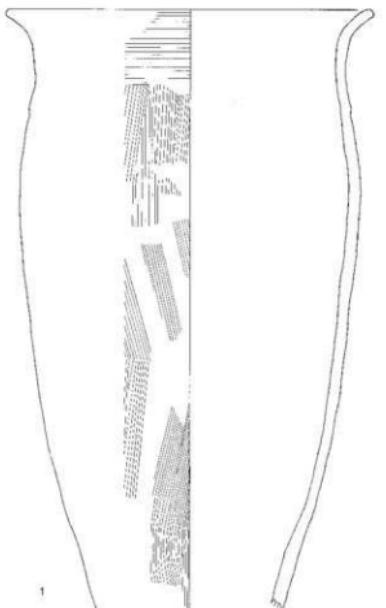
今回の調査でも極端に遺物量の少ない遺構で、図示した5の黒色土器Aのみの出土である。底部切り離しは回転糸切りであった。

**SB18（第31図）**

SB18出土として取り扱ったが、遺構の重複関係からSB16帰属の可能性もある遺物である。底部切り離しについて、6は残存部位が少なかったため糸切りであることがわかったのみであり、7は回転糸切りと観察できた。

**SB20（第32図）**

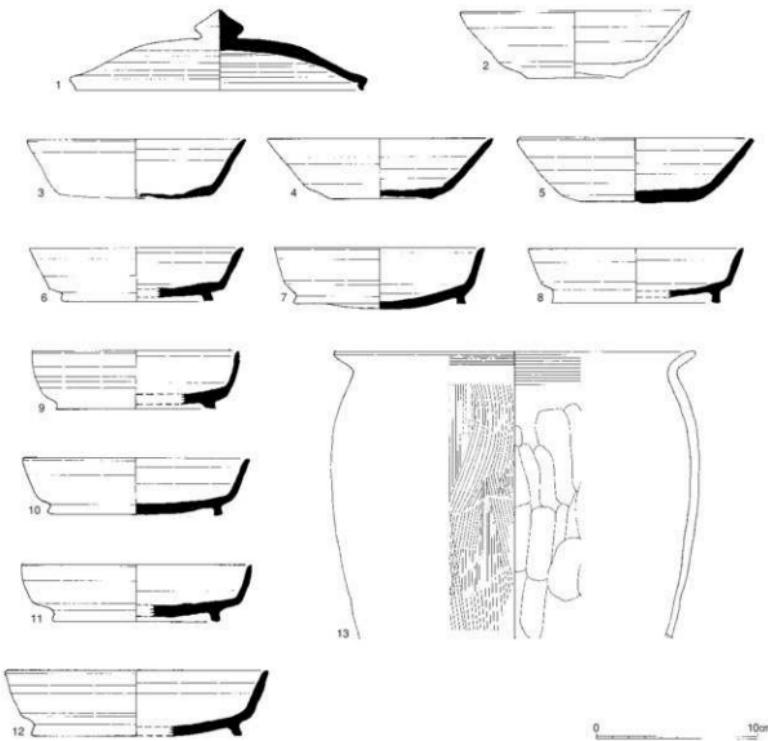
遺構上部の大半を削平されていたため、1の土師器壺Bのみの出土である。外面のハケメ調整はやや不規則であり、口頸部の形態や全体の法量からやや古い様相と考えられる。



第32図 SB20出土土器

## SB22（第33図）

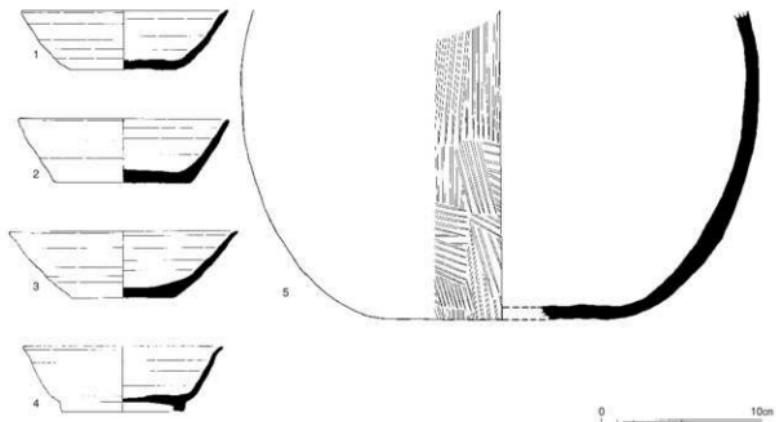
SB22からは多くの遺物が出土した。1の壺蓋は宝珠形の立体的なつまみと「く」の字に近い屈曲の端面が特徴である。須恵器壺A、壺Bの底部切り離しに関して回転糸切りは2、4、10の3点のみで、他は回転ヘラ切りまたはヘラ切りであった。また壺Bについては、7のように高台の内側で接地するものがあること、6～12のように「ハ」の字形に聞く高台を有することが特徴として挙げられる。また、13の土師器甕Bは内面ナデ調整を施しており、これは4期以降の特徴とされる（小平1990）。



第33図 SB22出土土器

## SB23（第34図）

1～3の須恵器壺Aのうち、1の底部切り離しは回転ヘラ切りで、2～3は回転糸切りであった。また、壺Bについては4のように内向きの高台で端面にくぼみを有するものは5期以降に特徴的とされる（小平1990）。5の須恵器甕AはSB23床面に貼り付くように出土した。



第34図 SB23出土土器

**SB24（第35図）**

SB24出土土器のうち図示できたものは1の須恵器壺Aのみであった。底部は回転糸切りである。口径は13.6cm、底径6.0cmで焼成は良好である。

**SB25（第35図）**

2は須恵器高壺Aの脚部で、上半は細めの筒状で裾部では強く開く。中央道調査での所見からは古代1～4期に見られる器形とされる（小平1990）。

**SB26（第35図）**

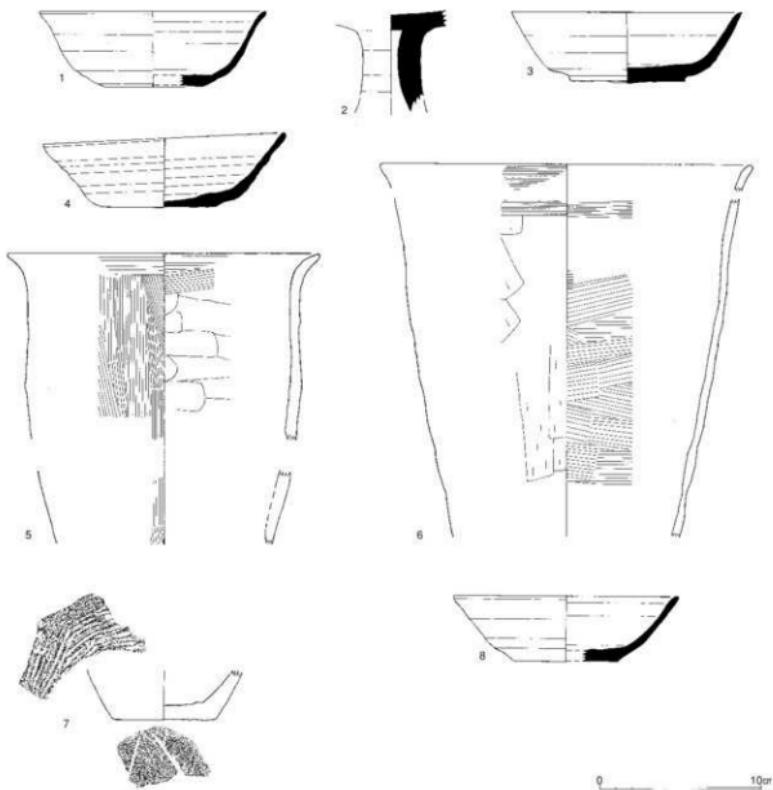
3の須恵器壺Aのみ図示できた。底部切り離しは回転ヘラ切りである。口径は14.0cm、底径が7.0cmと壺Aのうちではやや大きい。

**SB27（第35図）**

4の須恵器壺Aは歪んだつくりとなっており、底部はヘラ切りで、「一」の字様のヘラ描き痕跡が観察される。またこの他に土師器甕Bが2点出土している。いずれも口縁部の外反は弱く、内外面共に調整の方向は不規則である。いずれも内外面に炭化物が付着する。

**SB29（第35図）**

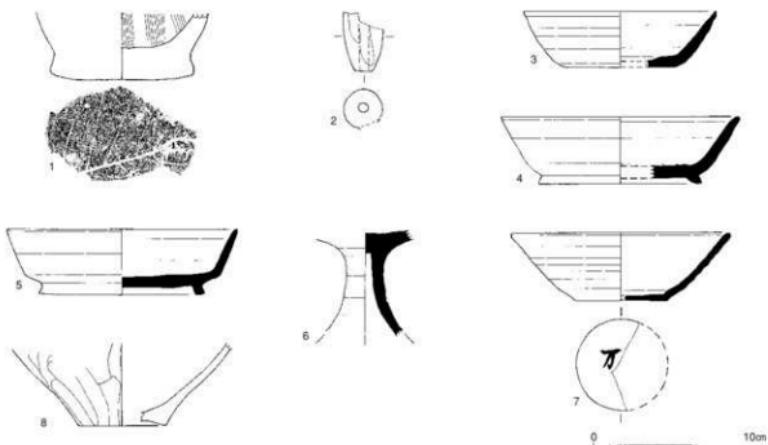
8の須恵器壺Aのみ図示できた。底部切り離しは回転糸切りである。



第35図 SB24～SB29出土土器  
SB24: 1 SB25: 2 SB26: 3 SB27: 4～7 SB29: 8

#### 豎穴建物跡以外の遺構、遺構外（第36図）

豎穴建物跡以外の遺構から出土した遺物で特徴的なものを図示した。2はP70からの出土であり、この調査で確認された唯一の土錘である。外面は丁寧なミガキ調整を施している。6は高環Aの脚部であり、上半は細めの筒状で裾部では強く開く。7の須恵器環Aは遺構外からの出土であるが、墨書きが確認できた。回転糸切りの底部外面に「万」の字が書かれている。器厚はやや薄く、口縁部の開きが大きい器形である。



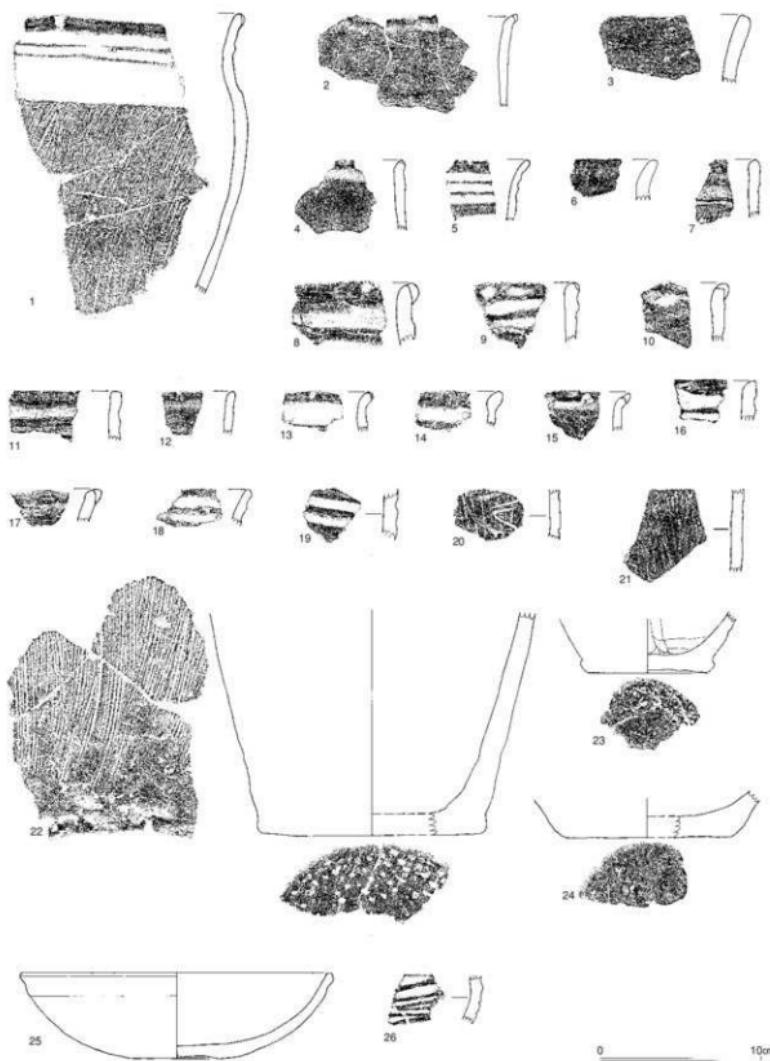
第36図 土坑、ピット、遺構外出土土器  
P46: 1 P70: 2 SK7: 3~4 検出面: 5~8

#### 遺構外出土の縄文土器（第37図～第38図）

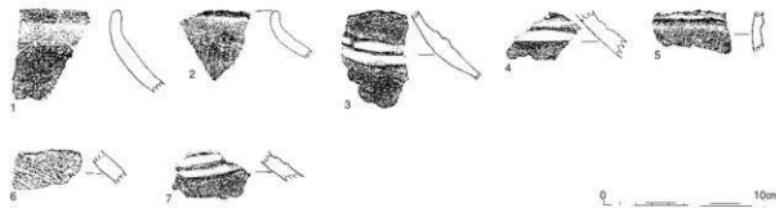
東調査区を中心にまとめた量の縄文時代に比定される土器が出土した。これらはE8グリッドを中心によこまつておらず、この場所にこの時期の遺構等が存在した可能性がある。縄文時代晩期に比定されるこれら土器については小諸市水遺跡発掘調査資料の所見を参考にする（宇佐美1998、小林・宇佐美1998）。

1は細密条痕が施される深鉢形土器で口外帶を持ち、体部上半に最大径を有する。水遺跡発掘調査資料では堀とされているものである。体部に細密条痕を施した後に、体部上半最大径よりも上の無文帯に丁寧な横方向のミガキ調整を加えている。22も縦方向の細密条痕が施された深鉢の底部である。また、20は地文の上に沈線文を有する。この他、1の口縁部付近に見られるのと同様の幅広の沈線や頂部にキザミを有する突起を持つ土器が多く確認された（第37図5～19）。これら土器に施される沈線は水遺跡の分析において、4種とされる「幅が広く浅い沈線で、棒状工具で施されたというよりも、指掌などで施されたと考えられるもので、沈線と呼ぶよりは、幅広凹線と呼んだ方がよいようなもの」を含む（小林・宇佐美1998）。25は全体の器形がわかる浅鉢形土器で、口縁部下の無文帯には朱彩が施される。口縁部は内湾せず緩やかに立ち上がる。底部はやや上げ底となっている。29は壺形土器の体部上半であり、隆帶を有する。30、33も意匠は類似するが沈線手法によるものである。

この他、西調査区の一部から弥生時代後期と考えられる赤彩を施した土器片も遺構外から散見されたが、量的にはごく僅かで図示できていない。調査区近辺にこの時代の遺構等が存在する可能性が示唆される。



第37図 遺構外出土縄文土器



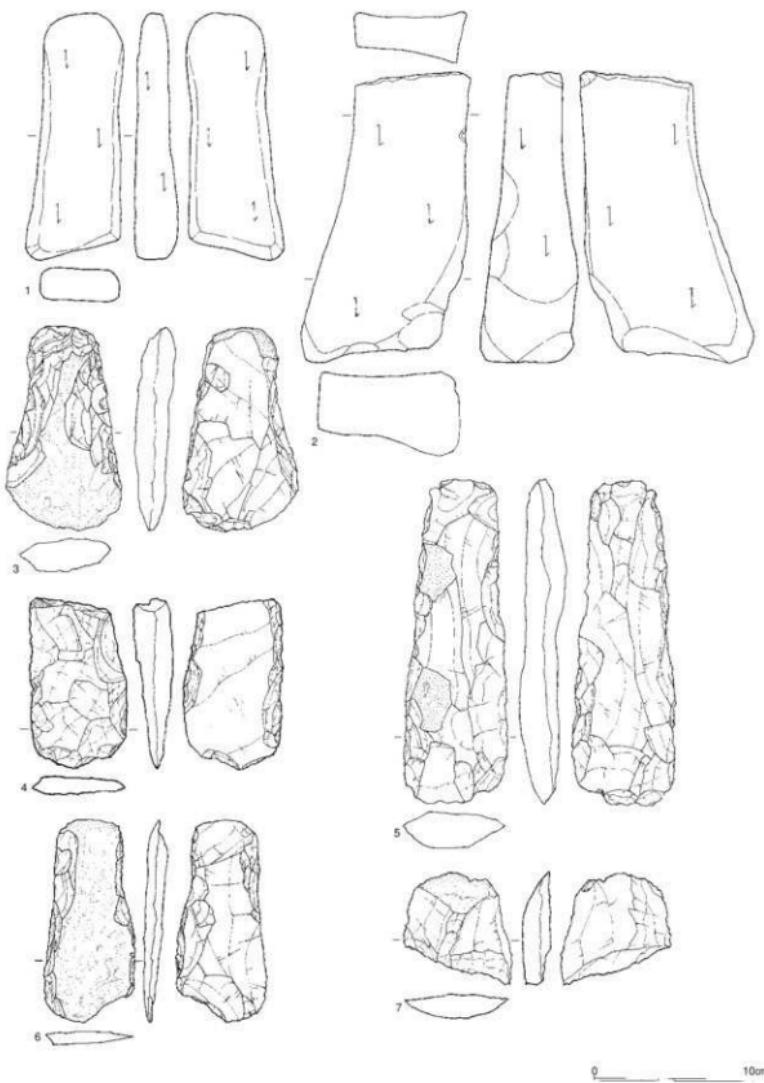
第38図 遺構外出土縄文土器

## 石器・石製品（第39図～第40図）

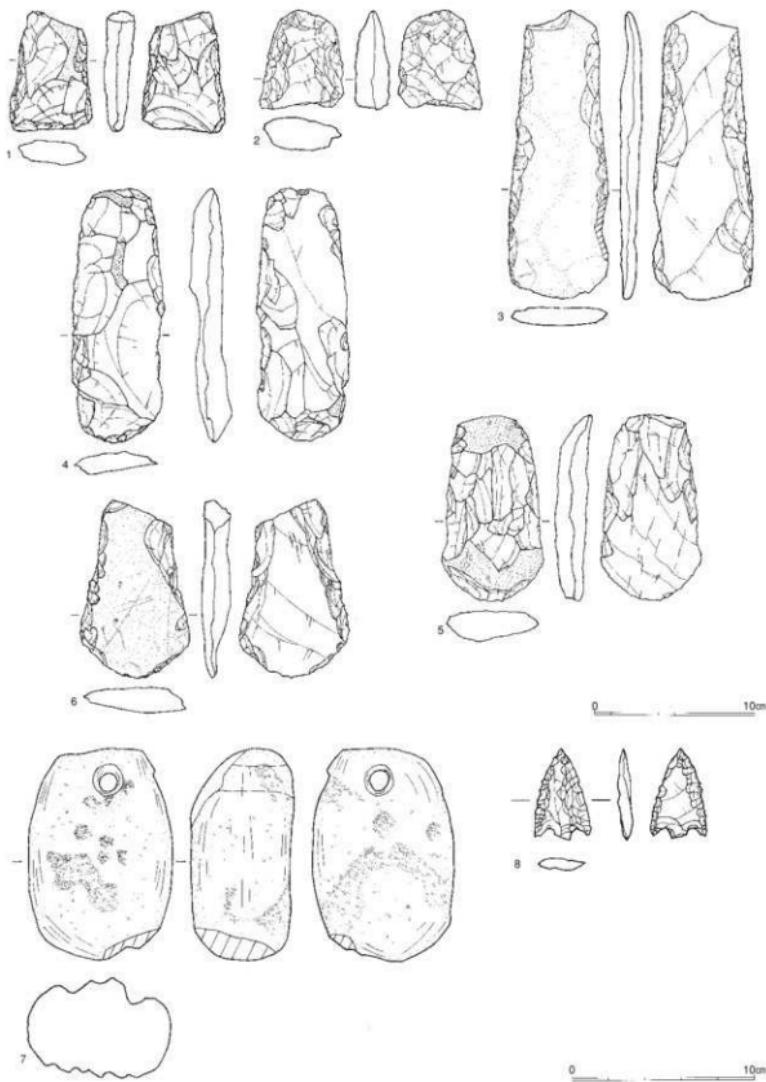
今回の調査では石器・石製品として用途が推察できるものが15点出土している。第39図1および2は砥石で、竪穴建物跡出土遺物である。3は打製石斧で土坑出土である。第39図4～第40図6も打製石斧であるが、これらは検出面および土層観察用トレンチからの出土であった。出土位置としては東調査区であるE8グリッド近辺が目立ち、前述の縄文土器と関連があると考えられる。7は浮石製の石製品でありSB14からの出土である。用途については、第4章で若干の検討を行った。全体的に敲打によって成形をしているが、仕上げに若干の研磨を行っていることが確認できた。また、穿孔部分も表裏両面で擦痕が確認できる。重量は乾燥時に16.0gであった。8は黒曜石製の石鏃である。東調査区E8グリッド検出面から出土した。前記の打製石斧と同様に、この調査で確認された縄文時代晩期土器と関連があるものと考えられる。

## 鉄製品

今回の調査では、主として竪穴建物跡から数点の鉄製品が出土した。いずれも小片でかつ酸化しており原形をとどめていないため、図示および用途の推定は困難である。石器・石製品の項で触れたとおりこの調査によって砥石が出土していることからも、利器としての鉄製品の利用がこれら竪穴建物跡の属する時代には行われていたことがわかる。



第39図 出土石器・石製品



第40図 出土石器・石製品

## 第4章 総括

三枚橋・藤塚遺跡で確認された集落跡について、遺物の記述でも挿り所とした中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見を参考に記述する（小平1990）。時期決定に関し、中央自動車道関連の発掘調査から松本盆地の古代は15期に区分され、7・8期を画期に大きく前半と後半に分けられる。壺などの食器の変遷からは、1～3期、4～6期、7・8期、9～11期、12～15期に大別される。これを基に段階を設定し下表に各段階の特徴を表す。

第1表 時期設定と段階区分（小平1990を参考に作成）

暦年代	時期	段 階	特 徴
7世紀後半 ／ 8世紀中葉	1期 2期 3期	第1段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>●食器で非口クロ調整の土師器壺や高壺、須恵器壺D、貯蔵具もフラスコ形瓶など古墳時代的な様相</li> <li>●須恵器壺Aや壺Bが漫透</li> </ul>
8世紀後葉 ／ 9世紀前半	4期 5期 6期	第2段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>●在地産の須恵器を軸に食器が構成され、定形的な器形と厳しい法量分化の規制</li> <li>●土師器壺B・小型壺Dへの定形・規格化</li> </ul>
9世紀後半	7期 8期	第3段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>●椀・皿の登場</li> <li>●黒色土器Aが食器の主体</li> <li>●貯蔵具に灰釉陶器の壺・瓶類が加わる</li> </ul>
10世紀	9期 10期 11期	第4段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>●食器から須恵器が衰退し、在地の土師器と黒色土器A、灰釉陶器などで構成</li> <li>●煮炊具は10期で長胴壺と小型壺の組合せから羽釜と小型壺の組合せへと変化</li> <li>●10期以降貯蔵具は灰釉陶器の広口瓶と短頸壺が主体</li> </ul>
11世紀前半 ／ 12世紀前半	12期 13期 14期 15期	第5段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>●食器の構成は前段階と変わらないが、壺・椀・皿などに大小の法量分化</li> <li>●堅穴建物跡からの煮炊具の減少</li> </ul>

上記を参考に、今回の発掘調査で主体的に出土した須恵器壺の法量分布を検討する。上表にもあるように第2段階において食器の主体を占める須恵器は定形・規格化する傾向が確認されている。なお、今回の調査で食器類として須恵器壺以外が主体的に出土した堅穴建物跡はない。第41図はこの調査で出土した須恵器壺の口径と器高の分布である。高台を有しない須恵器壺Aについては、口径12.5～14.0cm・器高3.5～4.5cmに多く分布する傾向がある。このように壺Aが定型化する傾向は第2段階に認められる。また、口径12.0cm以下・器高4.0cmである小型のものは第1段階に認められる。次に高台を有する須恵器壺Bについてみると、口径12.0～14.5cm・器高3.0～4.5cmと壺Aと同様の分布の傾向を示す。ただし壺Bはこの他、口径15.0～16.0cm・器高3.0～4.0cmに分布する壺BII、口径15.0～16.0

cm・器高6.0~7.0cmに分布する壺BⅢも確認され、第2段階に認められる在地産須恵器の盛行を背景とした規格化と法量分化の傾向を裏付けることができそうである。前述のとおり、須恵器壺以外が主体的に出土した堅穴建物跡は確認されないことから、今回調査地点は主として古代前半期に比定され、なかでも第2段階以降が主体的であると考えられる。

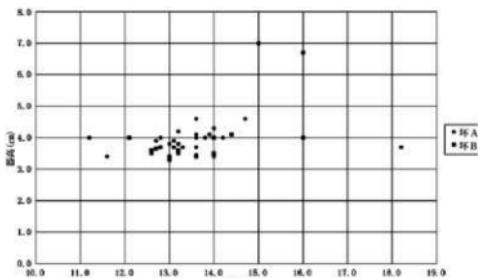
次に建物跡の主軸方向の検討を行う。調査段階から建物跡の配列に傾向性が認められたため、カマド等の施設を有し主軸方向のわかる建物跡について主軸方向を、主軸の不明な建物跡については長軸方向を計測した。対象は堅穴建物跡と掘立柱建物跡である。結果は付表1および第42図のとおりとなった。

これにより、主軸方向のわかるものだけでも16棟がN $66^{\circ}$  EからN $87^{\circ}$  Eの間に分布し、またこれと直行するN $8^{\circ}$  WからN $15^{\circ}$  Wにも4棟が分布する。これは主軸の判明した23棟のうち86.9%であり、建物の建築にあたって方向的な規制または動機付けがあった可能性を示唆する。

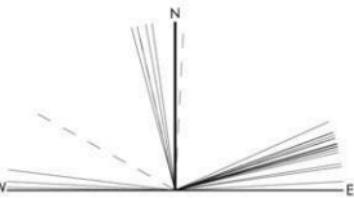
続いて堅穴建物跡から出土した遺物によって各建物跡の段階比定を行った。その結果、前述の2~3段階に比定される堅穴建物跡が多いが、やや古く古墳時代的な様相をもつ1段階や1~2段階に比定されるものも存在する。平面的な分布では、2~3段階の建物跡が西調査区の中央から東にかけて分布しているのに対し、1段階または1~2段階と考えられるSB1、SB27、SB20は調査区西壁に接する。このことから、調査区外西側に8世紀代の集落が広がっている可能性がある。また、2~3段階とした建物跡についても、より詳細な遺物の型式学的分析および切り合い関係等の観察から遺構間の時期差を抽出することが可能と考えられる。

SB14から出土した浮石製石製品について、用途が漁撈用の浮子と推察されたがその形態からは装飾品等の可能性も捨て切れない。このため、実際に水に浮かべ水没するまでの時間を計測した。その結果、室内において静止した水面に石製品を浮かべたところ、約84時間経過しても水没しなかったため浮子としての実用性は確認されたと考えられる。なお、重量は乾燥時に16.0gであったものが、水面に浮かせた84時間後には水分を含んで26.3gとなった。

縄文時代晩期に比定される東調査区E8グリッドを中心として出土した土器群は、この時期としては浮線文が確認されないことが特徴といえる。そこで浮線文施文以外の出土土器から考察すると、細密条



第41図 須恵器壺口径・器高分布



第42図 建物跡主軸方向

痕深鉢（水遺跡発掘調査資料では壺とされているもの）の存在や精製無文浅鉢の形態及び調整等の特徴から氷I式古～中段階と考えられる。この段階は小林・宇佐美両氏によると東北地方の大洞A式新段階から大洞A式古段階に比定できるとされる。幅の広い沈線文などは大洞A式にみられる施文・調整の特徴に類似するもののほか、水遺跡発掘調査図譜の考察において4種とされる沈線文は浮線文に後続するものとして位置づけられている（小林・宇佐美1998）。安曇野市では氷I式前段階の土器群として標式とされる離山遺跡第8類土器が晩期としては著名であるが、今回調査で出土した土器群はこの離山段階に後続する一群として新しい様相を呈すると捉えることができる。

今回の発掘調査では8世紀から9世紀にかけての安曇野のムラの一端が解明された。北アルプスを西側に抱き、そこから流れ出る幾筋もの河川がつくりだす扇状地に位置する矢原遺跡群では、古代から人々が水の獲得に高い関心を寄せていたといえる。今回調査地点でも、西調査区の中央付近に大規模な河川流路跡が観察される。該期のムラはこの川の作用によって堅穴建物跡の壁が破壊されるなど一定程度の被害を受けていると観察できたが、その後も人々は河川作用によって運搬された土砂を掘り込み掘立柱建物や堅穴建物などを建設している。漁撈具と考えられる浮石製品も出土していることから、三枚橋・藤塚の地に暮らした人々の営みが西方に聳える山々から流れ出る川の流れと密接に結びついていたことがわかる。

この発掘調査は、安曇野市として初めての発掘調査となりました。穂高交流学習センター建設に伴う調査でもあり、多くの市民参加を得た調査および報告書刊行となりました。これを機に一人でも多くの皆様に安曇野市の埋蔵文化財に興味関心を持っていただければ幸いと存じます。末筆になりましたが、御理解・御協力を頂戴しました全ての皆様に深甚なる謝意を表し、結びとさせていただきます。

引用・参考文献（五十音順）

- 明科町教育委員会 1991 「ほうろく屋敷遺跡」明科町の埋蔵文化財第3集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2000 「明科庵寺址」明科町の埋蔵文化財第7集 明科町教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2006 「東小倉遺跡V」安曇野市の埋蔵文化財第1集 安曇野市教育委員会
- 宇佐美哲也 1998 「土器」「水遺跡発掘調査資料図譜第2冊」 水遺跡発掘調査資料図譜刊行会 pp.17-45
- 小平和夫 1990 「第5節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』 長野県教育委員会 pp.97-158
- 小林青樹・宇佐美哲也 1998 「水式土器の研究」「水遺跡発掘調査資料図譜第3冊」 水遺跡発掘調査資料図譜刊行会 pp.128-169
- 農科町教育委員会 1992 「吉野町館跡遺跡」 農科町教育委員会
- 農科町教育委員会 1993 「梶海渡遺跡」 農科町教育委員会
- 農科町教育委員会 1994 「鳥羽館跡遺跡」 農科町教育委員会
- 農科町教育委員会 1999 「町田遺跡」 農科町教育委員会
- 農科町東山遺跡調査会編 1999 「筑摩東山—上ノ山・菖蒲平窯跡群発掘調査報告一」 農科町教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 1987 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1岡谷市内」 長野県教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 1989 「上手木戸遺跡—中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書10（松本市内その7・農科町内）一」 長野県教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 1993 「北村遺跡—中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11（明科町内）一」 長野県教育委員会
- 奈良文化財研究所 1962 「平城宮跡発掘調査報告書II」 奈良文化財研究所
- 穂高町誌編纂委員会編 1991 「穂高町誌」 穂高町誌刊行会
- 穂高町教育委員会 1972 「離山遺跡」 穂高町教育委員会
- 穂高町教育委員会 1987 「矢原遺跡群（馬場街道遺跡）」 穂高町教育委員会
- 穂高町教育委員会 2001 「穂高町他谷遺跡」 穂高町教育委員会
- 堀金村教育委員会 1988 「神沢遺跡・田多井古城下遺跡・そり表遺跡」 堀金村の埋蔵文化財第1集 堀金村教育委員会
- 三郷村誌編纂会 1980 「三郷村誌I」 三郷村誌編纂会
- 三郷村教育委員会 1988 「黒沢川右岸遺跡」 三郷村の埋蔵文化財第1集 三郷村教育委員会
- 三郷村教育委員会 1995 「東小倉遺跡」 三郷村の埋蔵文化財第2集 三郷村教育委員会
- 三郷村教育委員会 1997 「東小倉遺跡」 三郷村の埋蔵文化財第3集 三郷村教育委員会
- 三郷村教育委員会 2003 「東小倉遺跡III」 三郷村の埋蔵文化財第5集 三郷村教育委員会
- 三郷村教育委員会 2005 「東小倉遺跡IV」 三郷村の埋蔵文化財第6集 三郷村教育委員会
- 山形村教育委員会 2007 「名竈遺跡」 山形村遺跡発掘調査報告書第13集 山形村教育委員会

付表1 建物跡観察表

名称	位置 (グリッド)	規模(m)			平面形	主軸方向 (長軸方向)	如・カマド	段階	備考
		主軸 (長軸)	直行軸 (対軸)	壁高					
SB1 A1, A2		4.6残存	4.6	0.35	方形	(N61°W)	確認されず	1	
SB2 A3		3.3	3.0	0.15	方形	N83°W	東壁中央にカマド	古墳	
SB3 A3, A4		4.3	3.7	0.40	方形	N74°E	東壁中央に焼土	IND	SB24と切り合う
SB4 A4		3.3	3.0	0.35	方形	N15°W	北壁中央に焼土	2~3	SB23と切り合う
SB5 B3		2.2残存	2.2残存	0.15	方形	IND	確認されず	IND	半分のみ残存
SB7 B4		4.0	4.5	0.35~0.45	方形	N8°W	北壁に2箇所焼土	2~3	
SB9 B3, B4, C3, C4		3.4	2.8	0.40	方形	(N75°E)	確認されず	2~3	SB10と切り合う
SB10 C3, C4		4.6	5.0	0.35	方形	N75°E	東壁中央にカマド	2	SB9と切り合う
SB11 B2, C2		2.8	3.0	0.20	方形	N71°E	東壁付近にカマド	2~3	河川で削平される
SB14 D4, D5		4.4	4.7	0.25	方形	N74°E	西壁中央にカマド	IND	
SB15 D3		3.4	3.7	0.15	方形	N75°E	東壁中央に焼土	2~3	
SB16 E3		3.5	4.1	0.35	方形	N87°E	東壁中央にカマド	IND	SB18と重複
SB17 D2		3.2	3.3	0.20	方形	N66°E	東壁中央にカマド	3	
SB18 E3		5.4	4.1	IND	方形	IND	確認されず	2~3	SB16と重複
SB19 A2		3.2	2.7残存	0.15	IND	N89°W	西壁中央にカマド	IND	
SB20 F2		1.4残存	2.6残存	IND	方形	N72°E	東壁にカマド	1	上部削平される
SB21 F2, F3		4.0	2.2残存	0.20	方形	(N72°E)	確認されず	IND	
SB22 E4, E5		4.7	4.8	0.35	方形	N70°E	西壁中央にカマド	1~2	
SB23 A4		3.2	3.2	0.20	方形	N72°E	東壁中央付近にカマド	2~3	SB4と切り合う
SB24 A3, A4		4.3	3.7	0.20	方形	N74°E	東壁中央にカマド	IND	SB3と切り合う
SB25 A3		4.3	2.0残存	0.30	方形	N87°W	確認されず	1~2	
SB26 A3		2.5残存	2.2	0.40	方形	(N3°E)	確認されず	IND	
SB27 E2		2.4残存	4.3	0.30	方形	N81°E	東壁中央にカマド	1	SB28と切り合う
SB28 E2		2.1残存	4.0	0.40	方形	N82°E	東壁中央にカマド	IND	SB27と切り合う
SB29 E4, E5		4.3残存	4.1残存	0.35	方形	(N13°W)	確認されず	IND	
ST1 C2		5.2	3.4	—	2間×3間	N13°W	確認されず	IND	
ST2 C2, D2		4.7	2.4	—	1間×3間	N77°E	確認されず	IND	
ST3 C2, C3, D2, D3		6.3	3.7	—	2間×3間	N76°E	確認されず	IND	
ST4 C3		3.2	3.1	—	1間×2間	N70°E	確認されず	IND	
ST5 E3		2.3	1.4	—	1間×2間	N10°W	確認されず	IND	

付表2 出土土器・土製品観察表

図版 NO	遺物 NO	遺物名 出土位置	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部
								外面調整	内面調整	底部	
25	1	SB01	土師器	甕 G	16.3	8.0	30.0	ハケメ	ナデ	ナデ	口縁部～底部
26	1	SB02	土師器	甕 G	22.4	IND	IND	ハケメ	ナデ	IND	口縁部～体部下半
26	2	SB02	土師器	器台	IND	7.6	IND	ミガキ	ミガキ	IND	底部
26	3	SB02	土師器	台付甕	IND	4.1	IND	ナデ	ナデ	IND	底部～台部
26	4	SB03	須恵器	环蓋	13.6	—	3.1	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	—	体部
26	5	SB03	土師器	高环	IND	2.4	IND	ミガキ	ミガキ	IND	底部～台部
26	6	SB03	土師器	高环	IND	3.0	IND	ミガキ	ミガキ	IND	底部～台部
26	7	SB04	須恵器	長颈壺 A	8.4	IND	IND	ロクロナデ	ロクロナデ	IND	口縁部～頸部
27	1	SB07	須恵器	环蓋	12.8	—	3.4	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	—	体部
27	2	SB07	須恵器	环蓋	16.2	—	3.9	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	—	体部
27	3	SB07	須恵器	环 A	13.6	6.3	3.5	ロクロナデ	ヘラケズリ+ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
27	4	SB07	須恵器	环 A	13.8	7.4	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
27	5	SB07	須恵器	环 B	15.0	11.0	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁部～底部
28	1	SB09	須恵器	环蓋	19.8	—	4.0	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ+ヘラケズリ	—	体部
28	2	SB09	須恵器	环 A	13.6	7.0	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁部～底部
28	3	SB09	須恵器	环 A	14.0	8.8	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
29	1	SB10	須恵器	环蓋	13.8	—	3.0	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	—	体部
29	2	SB10	須恵器	环蓋	17.4	—	3.7	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ+ヘラケズリ	—	体部
29	3	SB10	須恵器	环 A	13.0	6.1	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り+ヘラ調整	口縁部～底部
29	4	SB10	須恵器	环 A	13.2	6.8	3.8	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り	口縁部～底部
29	5	SB10	須恵器	环 B	12.7	9.2	3.7	回転ヘラケズリ+ナデ	回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り	口縁部～底部
29	6	SB10	須恵器	長颈壺 A	IND	11.6	IND	ヘラケズリ+ナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	体部上半～底部
29	7	SB10	須恵器	环 B	16.0	11.4	6.7	回転ヘラケズリ+ロクロナデ	回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り	口縁部～底部
30	1	SB11	黒色土器 A	环 A	15.1	5.8	4.4	ロクロナデ	ミガキ	回転糸切り	口縁部～底部
30	2	SB11	須恵器	环蓋	15.7	—	4.6	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	—	体部
30	3	SB11	土師器	小型甕 D	12.9	9.0	11.3	ナデ	ナデ	IND	口縁部～底部
30	4	SB11	土師器	甕 C	20.4	4.1	26.2	ナデ+ヘラケズリ	ナデ	ケズリ	口縁部～底部
30	5	SB14	須恵器	环 A	18.2	10.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	口縁部～底部
30	6	SB14	須恵器	环 A	11.2	5.8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	口縁部～底部
30	7	SB14	土師器	甕	IND	4.8	IND	ナデ	オサエ+ケズリ	木葉痕	体部下半～底部

図版 NO	遺物 NO	遺構名 出土位置	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部
								外面調整	内面調整	底部	
30	8	SB14	土師器	甌	IND	7.4	IND	ナデ	ナデ	木葉痕	底部
30	9	SB14	土師器	甌	IND	7.0	IND	ナデ	ケズリ	木葉痕	底部
30	10	SB14	土師器	甌	IND	9.0	IND	ナデ	ナデ	木葉痕	底部
31	1	SB15	須恵器	环 A	13.3	6.1	3.7	ロクロナデ+回転ヘラケズリ	ロクロナデ+回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り	口縁部~底部
31	2	SB15	軟質須恵器	环 A	13.1	6.1	3.9	ロクロナデ+回転ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
31	3	SB15	須恵器	环 A	13.1	5.6	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
31	4	SB15	土師器	小型甌 D	14.4	7.3	13.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
31	5	SB17	黒色土器 A	环 A	12.2	6.0	3.5	ロクロナデ	ミガキ	回転糸切り	口縁部~底部
31	6	SB18	須恵器	环 A	12.8	6.2	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	口縁部~底部
31	7	SB18	須恵器	环 B	13.2	9.2	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
32	1	SB20	土師器	甌 B	22.2	IND	IND	ナデ+ハケメ	ナデ	IND	口縁部~体部下半
33	1	SB22	須恵器	环蓋	17.6	-	4.9	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	-	体部
33	2	SB22	土師器	环 A	14.0	6.0	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
33	3	SB22	須恵器	环 A	13.2	9.4	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁部~底部
33	4	SB22	須恵器	环 A	13.6	6.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
33	5	SB22	須恵器	环 A	14.2	6.8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁部~底部
33	6	SB22	須恵器	环 B	13.0	9.2	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	口縁部~底部
33	7	SB22	須恵器	环 B	12.8	10.4	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁部~底部
33	8	SB22	須恵器	环 B	13.0	10.2	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	口縁部~底部
33	9	SB22	須恵器	环 B	12.6	9.7	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁部~底部
33	10	SB22	須恵器	环 B	13.6	10.6	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
33	11	SB22	須恵器	环 B	14.0	10.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	口縁部~底部
33	12	SB22	須恵器	环 B	16.0	12.8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁部~底部
33	13	SB22	土師器	甌 B	22.0	IND	IND	ハケメ	ナデ	IND	口縁部~体部上半
34	1	SB23	須恵器	环 A	12.6	6.4	3.5	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り	口縁部~底部
34	2	SB23	須恵器	环 A	12.7	8.2	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
34	3	SB23	軟質須恵器	环 A	13.9	6.2	4.1	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	回転糸切り	口縁部~底部
34	4	SB23	須恵器	环 B	12.1	7.4	4.0	回転ヘラケズリ+ナデ	回転ヘラケズリ+ナデ	回転ヘラ切り	口縁部~底部
34	5	SB23	須恵器	甌 A	IND	14.0	IND	タタキ	ナデ	ヘラ切り	体部下半~底部
35	1	SB24	須恵器	环 A	13.6	6.0	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部

図版 NO	遺物 NO	遺構名 出土位置	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部
								外面調整	内面調整	底部	
35	2	SB25	須恵器	高環A	IND	IND	IND	ロクロナデ	ミガキ	IND	底部～台部
35	3	SB26	須恵器	环A	14.0	7.0	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁部～底部
35	4	SB27	須恵器	环A	14.7	5.9	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	口縁部～底部
35	5	SB27	土師器	甕B	19.0	IND	IND	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	IND	口縁部～体部上半
35	6	SB27	土師器	甕A	22.6	IND	IND	ナデ+ハラケズリ	ナデ+ハラナデ	IND	口縁部～体部下半
35	7	SB27	縄文土器	深鉢	IND	6.4	IND	条痕	ナデ	木葉痕	体部下半～底部
35	8	SB29	須恵器	环A	13.6	6.2	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
36	1	P46	縄文土器	深鉢	IND	8.8	IND	ナデ	ケズリ	木葉痕	体部下半～底部
36	2	P70	土製品	土鍤	-	-	-	ミガキ	ミガキ	-	一部欠損
36	3	SK07	須恵器	环A	11.6	6.6	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	口縁部～底部
36	4	SK07	須恵器	环B	14.4	10.0	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	口縁部～底部
36	5	検出面	須恵器	环B	14.0	10.2	4.0	回転ヘラケズリ+ナデ	ロクロナデ+回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り	口縁部～底部
36	6	検出面	須恵器	高環A	IND	IND	IND	ロクロナデ	ロクロナデ	-	底部～台部
36	7	検出面	須恵器	环A	13.2	5.8	4.2	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	回転糸切り	口縁部～底部
36	8	北西トレンチ	土師器	甕	IND	5.4	IND	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	体部下半～底部
37	1	検出面	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ+条痕	ナデ	IND	口縁部～体部下半
37	2	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ミガキ	ミガキ	IND	口縁部
37	3	E-8-8	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	4	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ミガキ	ミガキ	IND	口縁部
37	5	東区検出面	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ミガキ	ミガキ	IND	口縁部～体部上半
37	6	検出面	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	7	検出面	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	8	検出面	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	9	検出面	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	10	E-9-3	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	11	E-9-3	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	12	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	13	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	14	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	15	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部

図版 NO	遺物 NO	遺構名 出土位置	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部
								外面調整	内面調整	底部	
37	16	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	17	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部
37	18	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ミガキ	ナデ	IND	口縁部
37	19	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	体部上半
37	20	E-9-1	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	条痕	ナデ	IND	体部上半～体部下半
37	21	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	体部下半
37	22	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	14.0	条痕	ナデ	網代痕	体部下半～底部
37	23	東区検出面	縄文土器	深鉢	IND	IND	7.3	ナデ	ナデ	木葉痕	底部
37	24	E-8-2	縄文土器	深鉢	IND	IND	10.2	ナデ	ナデ	木葉痕	底部
37	25	検出面	縄文土器	浅鉢	19.0	5.0	5.2	ミガキ	ミガキ	ミガキ	口縁部～底部
37	26	東区検出面	縄文土器	浅鉢	IND	IND	IND	ミガキ	ミガキ	IND	体部上半
38	1	E-8-4	縄文土器	壺	IND	IND	IND	ミガキ	ナデ	IND	口縁部～頸部
38	2	E-8-4	縄文土器	壺	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部～頸部
38	3	東区検出面	縄文土器	壺	IND	IND	IND	ナデ	ミガキ	IND	頸部～体部上半
38	4	E-9-1 サブトレンチ	縄文土器	壺	IND	IND	IND	ミガキ	ナデ	IND	頸部～体部上半
38	5	東区検出面	縄文土器	壺	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	頸部
38	6	E-8-2	縄文土器	壺	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	体部上半
38	7	E-8-2	縄文土器	壺	IND	IND	IND	ミガキ	オサエ	IND	体部上半

付表3 出土石器観察表

図版 NO	遺物 NO	遺構名 出土位置	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
39	1	SB14カマド	砾石	砂岩	15.1	5.7	2.6	259.9
39	2	SB14	砾石	砂岩	17.8	8.7	5.1	1045.8
39	3	検出面	打製石斧	硅化粘板岩	12.5	7.0	2.1	177.3
39	4	SK16	打製石斧	砂質粘板岩	10.4	5.8	2.3	166.8
39	5	東区検出面	打製石斧	砂岩	19.8	6.2	2.4	348.1
39	6	検出面	打製石斧	粘板岩	12.4	5.5	1.4	95.0
39	7	東区検出面	打製石斧	粘板岩	7.0	6.4	1.7	62.6
40	1	E-8-2	打製石斧	千枚岩	7.3	5.0	1.7	71.2
40	2	E-8-4	打製石斧	砂質粘板岩	6.0	5.0	2.0	72.2
40	3	検出面	打製石斧	硅質凝灰岩	17.6	6.1	1.1	164.1
40	4	検出面	打製石斧	砂岩	14.5	5.4	1.8	170.7
40	5	E-9-1	打製石斧	粘板岩	11.4	6.3	1.9	165.6
40	6	E-8-4	打製石斧	千枚岩	10.9	6.7	1.8	132.4
40	7	SB14	浮子	浮石	5.8	3.9	2.7	16.0
40	8	D-9-3	石錐	黑曜石	2.5	1.5	0.4	0.9



調査区全景（上が東）

調査前風景（北西から）



西調査区（上が東）



東調査区（上が東）





SB 4・SB23完掘（東から）



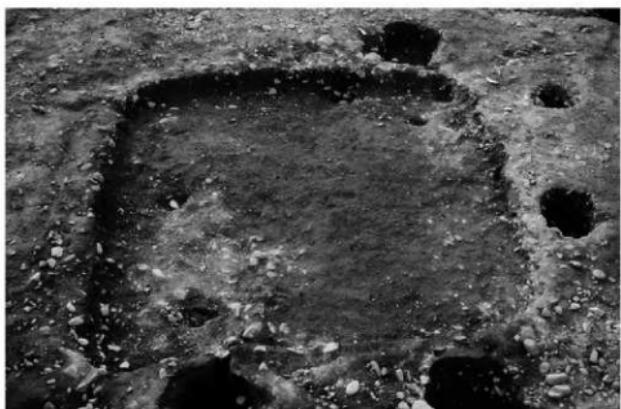
SB 7 完掘（東から）



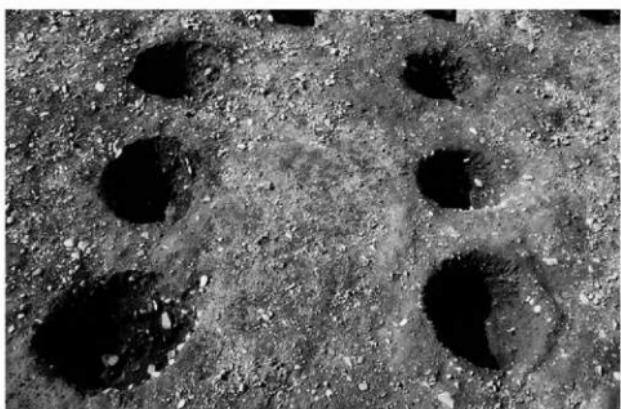
SB14完掘（東から）



SB15完掘（東から）



SB17完掘（東から）



ST 4 完掘（東から）

SK 4 完掘（東から）



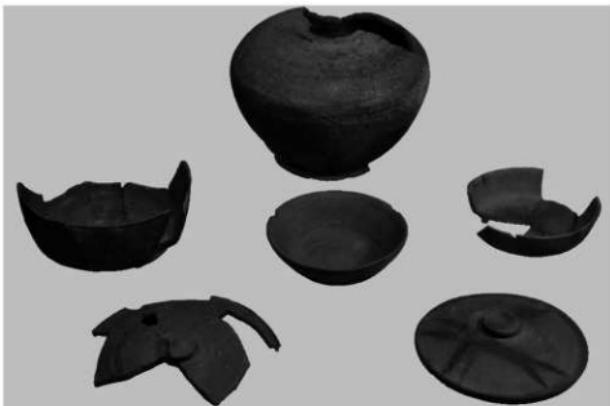
SB 1 遺物出土状況



SB 7 出土遺物



SB10出土土器



SB10出土須惠器蓋坏



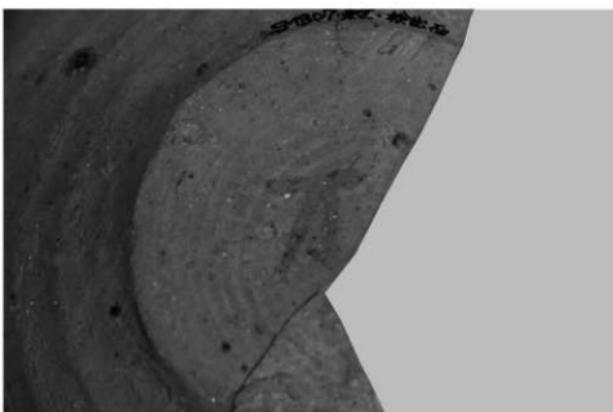
SB15出土土器



SB22出土土器



墨書土器



東調査区出土繩文土器



砾石



打製石器



浮子



三枚橋・藤塚遺跡発掘調査報告書抄録

ふりがな	さんまいばし・ふじつかいせき
書名	三枚橋・藤塚遺跡
副書名	安曇野市穂高交流学習センター建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第2集
編著者名	土屋 和章、森 義直
編集機関	安曇野市教育委員会
所在地	〒399-7102 長野県安曇野市明科中川手6824番地1 TEL0263-62-3001（代表）
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんまいば し・ふじつ かいせき 三枚橋・藤 塚遺跡	ながのけんあづみのし はたか 長野県安曇野市穂高	20220	穂高 99・90	36° 18' 95"	137° 18' 16"	20070926 /	2013m <sup>2</sup>	安曇野市 穂高交流 学習セン ター建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三枚橋・藤 塚遺跡	集落跡	縄文時代 奈良時代	竪穴建物跡 25棟 掘立柱建物跡 5棟 土坑・ピット・溝跡	縄文土器、石器 須恵器、土師器、鉄製品、 石製品	主として奈良時代に比定される 集落跡と河川流路跡を調査した。 また、縄文時代晩期の遺物が少 量ではあるがまとまって出土し ている。

安曇野市の埋蔵文化財第2集

## 三枚橋・藤塚遺跡

安曇野市穂高交流学習センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

発 行 安曇野市教育委員会

長野県安曇野市明科中川手6824番地1

電話0263-62-3001（代表）

印 刷 電算印刷株式会社

